

長野遺跡群

権堂腰巻遺跡

——（仮称）長野市大字鶴賀新築マンション計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2024年3月

長野市教育委員会

長野遺跡群

権堂腰巻遺跡

——（仮称）長野市大字鶴賀新築マンション計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2024年3月

長野市教育委員会



調査地から善光寺方面遠望（南東から）



調査区全景（上方が北）

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第173集として刊行いたします本書は、(仮称)長野市大字鶴賀新築マンション計画に伴って実施した、長野遺跡群権堂腰巻遺跡に関する発掘調査報告書であります。

発掘調査は、権堂地区の皆様のご理解とご協力を得て実施され、奈良時代から平安時代にかけての集落跡が検出されました。権堂地区における当該期の集落のありかたを考察するうえで重要な資料が得られております。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

長野市教育委員会
教育長 丸山 陽一

例 言

- 1 本書は、「(仮称) 長野市大字鶴賀新築マンション計画」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、開発事業者の株式会社フージャースコーポレーションと長野市との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会が直轄事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 権堂腰巻遺跡（遺跡番号 C-027）は、本調査を受けて新規に登録された遺跡である。
- 4 調査地は、長野県長野市大字鶴賀字腰巻 2261-5 外に所在する。調査面積は 507 m² である。
- 5 発掘調査は、令和 4 年 12 月 12 日から令和 5 年 1 月 30 日にかけて実施した（50 日間）。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は令和 5 年度に行った。
- 6 現場における発掘調査は鹿田奨之・青木一男・田中暁穂が担当した。報告書の編集は鹿田が行った。なお、執筆分担は第 1 章、第 2 章、第 4 章を鹿田が、第 3 章を鹿田・青木・田中が担当した。
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター所管）で保管している。なお、本調査の略記号は、「NGGK」である。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。
- 2 遺構図の方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経 138° 30′ 00″、北緯 36° 00′ 00″）の座標値（日本測地系 2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構名は下記の略記号を用いて種別ごとに通し番号を付した。
 竪穴建物跡…SB、溝跡…SD、土坑…SK、小穴…SP
- 5 遺構実測図は、縮尺 1/20 で作成した原図をもとに、縮尺 1/80 で掲載した。微細図その他についてはその限りではない。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに土器 1/4、土製品・石製品 1/2、金属製品 1/3 の縮尺で掲載した。
- 7 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 遺構実測図において、焼土・被熱面は 、礫は 、炭層範囲は  とした。
 土器実測図において、 は黒色処理の範囲、断面が  は須恵器、 は軟質須恵器、 は灰釉陶器である。
- 9 土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
- 10 時期設定に関わる土器編年・器種分類に関しては、屋代編年（鳥羽英継 2000）を使用した。遺物の時期決定に際しては鳥羽英継氏から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに厚く御礼を申し上げる。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 試掘調査の概要	3
第3節 調査体制と調査日誌抄	5
第2章 調査地周辺の考古学的環境	7
第3章 調査成果	9
第1節 発掘調査の概要	9
第2節 遺構	13
第3節 遺物	18
第4章 まとめ	28

報告書抄録

奥付

挿図目次

図1 調査地位置図	1	図6 調査区設定図	10
図2 調査地位置図	2	図7 下層確認トレンチ設定図	10
図3 試掘調査位置図	3	図8 下層確認トレンチ土層図	11
図4 試掘調査土層柱状図	4	図9 調査区全体図	12
図5 調査地周辺の遺跡	8		

図版目次

図版1 遺構実測図 SB1～SB4	図版6 遺物実測図 SB3、SB2・3、SB4
図版2 遺構実測図 SB5～SB8	図版7 遺物実測図 SB4～6
図版3 遺構実測図 SD1～3、SK1～4、9、11	図版8 遺物実測図 SB7、8、SK3、6
図版4 遺構実測図 SK6、10、SP1～3、6～8 B区 SP1～3	図版9 遺物実測図 SK11、検出面下層 土製品・石製品・金属製品
図版5 遺物実測図 SB1～3	

表目次

表1 出土土器観察表	21
表2 土製品・石製品・金属製品観察表	27

写真目次

写真1 保護対象区域（上方が北）	2	写真4 作業員による遺構掘削	6
写真2 重機による表土除去作業	6	写真5 調査区全景（南西から）	6
写真3 作業員による検出作業	6		

写真図版目次

遺構写真図版1 A・B区全景	遺物写真図版1
遺構写真図版2 SB1～5、SK3、4	遺物写真図版2
遺構写真図版3 SB5～8	遺物写真図版3
遺構写真図版4 SB6、SD1～3、SK1、3	遺物写真図版4
遺構写真図版5 SK2、4、6、9～11	遺物写真図版5
遺構写真図版6 SK11、A区北トレンチ	
遺構写真図版7 A区中央トレンチ、近現代井戸A	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

調査地におけるマンション建設計画の覚知は、株式会社フージャースコーポレーション（以下、開発事業者）から長野市教育委員会（以下、市教委）への令和4年4月11日付の照会であった。当該地は平成30年度に実施された県庁緑町線建設に先立つ長野遺跡群後町遺跡の発掘調査の結果、新たに長野遺跡群として拡大登録された箇所であり、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するために試掘調査が必要となる旨を通知した。その後、令和4年4月20日付で事業計画地西側の、10月17日付で東側の試掘調査依頼書が提出され、5月12日に事業計画地西側の、10月24日に東側の試掘調査を実施した。事業計画地西側においては、近現代の攪乱等により埋蔵文化財の包蔵は確認されなかったが、東側においては遺物包含層の堆積と遺構とみられる落ち込みが確認されたことから10月26日付4埋第5-23号報告で事業前の埋蔵文化財の保護措置が必要となる旨を通知した。

その後、開発事業者から11月28日付で文化財保護法第93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が提出され、これに対して市教委から12月7日付4埋第2-296号通知で「発掘調査」の保護措置を指示した。その後、開発区域の全域3,078.19m²を保護対象とし、うち埋蔵文化財への影響が排除できない範囲462m²を対象に記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。その後、12月1日付で発掘調査依頼書の提出を受け、12月8日付で開発事業者との間に「埋蔵文化財保護に関する協定」を締結し、12月9日付で令和4年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。なお、調査に必要な掘削用の重機や作業員休憩用のコンテナハウスなどについては、開発事業者（委託者）から現物提供された。現地での発掘作業は、令和4年12月12日から令和5年1月30日までの50日間行った。その後、令和5年3月13日付で委託契約の変更を行った後、同年3月20日付で「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を開発事業者あてに提出し、令和4年度分の業務を終了した。そして、令和5年度に整理調査を行い、本書を刊行するに至った。



図1 調査地位位置図（1：50,000）



図2 調査地位置図 (1 : 1,250)



写真1 保護対象区域 (上が北)

第2節 試掘調査の概要

本調査の実施に先立ち、事業計画地内の遺物包含層等の有無及び深さを確認することを目的として試掘調査を実施した。5月12日に事業計画地西側で（第1・2トレンチ）、10月24日に東側（第3トレンチ、第8トレンチ上層）で調査を行った。その後遺物包含層が残存している範囲及び近現代攪乱の範囲を確定するための試掘調査を11月16日、23日に実施している（第4～9トレンチ）。

試掘調査では、バックホウにより試掘坑を掘削し、試掘坑壁面の土層堆積状況の観察を行った。試掘坑は事業計画地内に任意の9地点に設定した（図3）。

試掘調査の結果、事業計画地東側の第3トレンチ・第6トレンチ・第8トレンチ・第9トレンチで炭化物、土器片等を含む黒褐色・暗褐色土層が確認され、この層を平安時代の遺物包含層と判断した。第8トレンチの北側では黒褐色土層の下層でカマドの被熱痕が確認されている（本調査SB4）。第5トレンチでは近現代の攪乱により地表下2mまでが破壊されていることが確認された。事業地西側の第1トレンチ・第4トレンチでは地表下1.7～2mまでの範囲で近現代の攪乱が確認され、第2トレンチ・第7トレンチでは近現代の攪乱の下層で地山層を確認したことから、事業計画地西側では埋蔵文化財の包蔵が認められないと判断した（図4）。

以上の試掘調査の結果から事業計画地西側と、東側の一部においては近現代の攪乱により埋蔵文化財が破壊されていること、中央付近においては地表下0.4～1.2mの深さに平安時代の遺物包含層が残存していることが確認された。

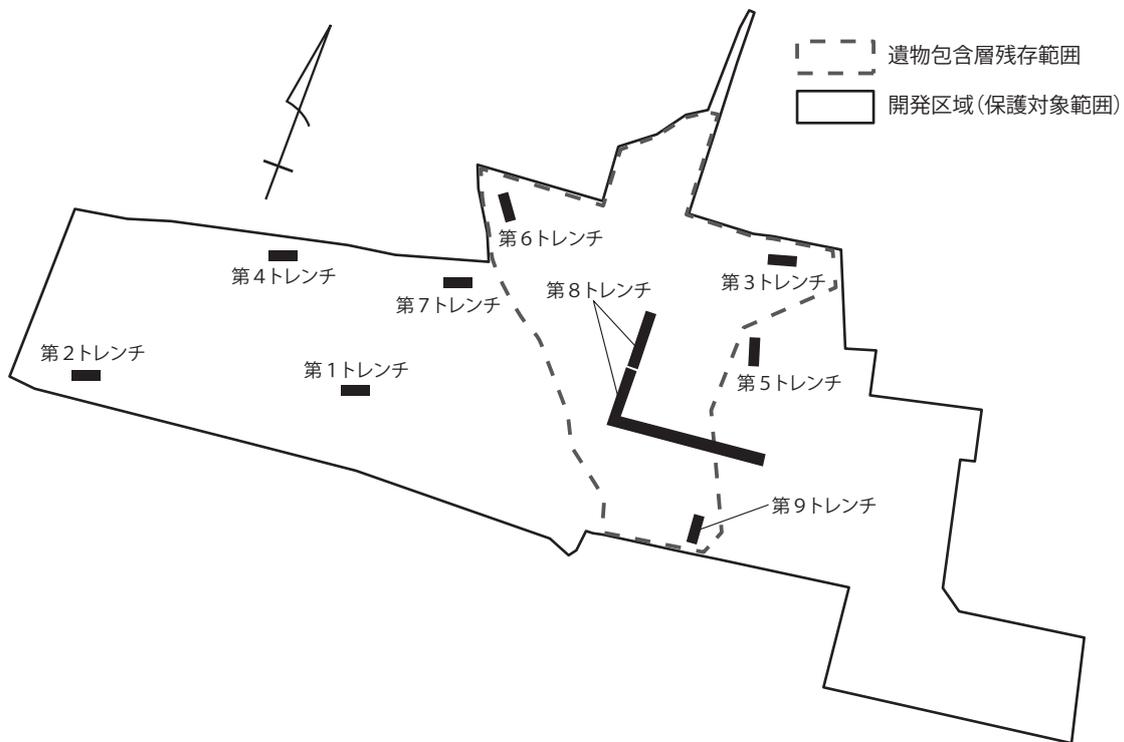


図3 試掘調査位置図

事業計画地西側

事業計画地東側

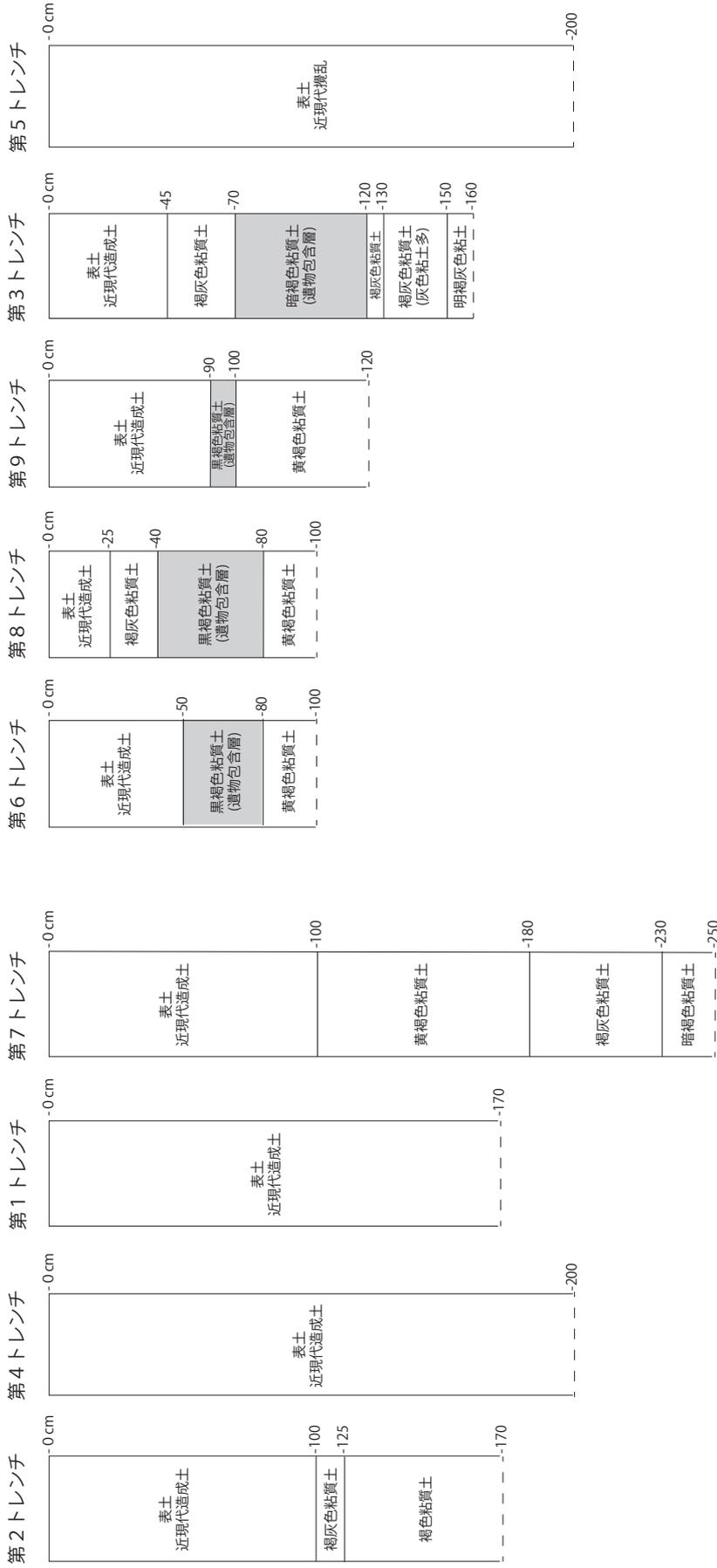


図4 試掘調査土層柱状図 (1 : 25)

第3節 調査体制と調査日誌抄

1 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として実施し、長野市埋蔵文化財センターが担当した。組織は以下の通りである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	丸山 陽一
総括責任者		教育次長	藤澤 勝彦
総括担当者	同	文化財課 課長	前島 卓（令和4年度） 石坂 陽子（令和5年度）
調査責任者	同	埋蔵文化財センター	主幹兼所長兼大室古墳館長 大井 久幸（令和4年度） 飯島 哲也（令和5年度）
調査担当者	同	文化財課（埋蔵文化財センター担当）	課長補佐 飯島 哲也（令和4年度） 〃 風間 栄一
庶務担当者	同	埋蔵文化財センター	所長補佐 伊藤 慶順（令和5年度）
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	主事	小林 和子（令和5年度）
	同	事務職員	宮本 博夫、平林満美子
	調査担当	主事（学芸員）	小林 和子（令和4年度）、鹿田 奨之（主任調査員）
	同	研究員	青木 一男（調査員）、田中 暁穂（調査員）、 千野 浩、清水 竜太、井出 靖夫、 鈴木 時夫（令和4年度）、山岸 龍二（令和5年度）、 越志 風沙（令和5年度）
発掘調査員	向山純子		
発掘補助員	後藤大地		
発掘作業員	青山三枝子、植木 義則、上原 律江、江守久仁子、大谷 盛孝、岡沢 貴子、金井 節、 島田 秀樹、杉本 千代、月岡 純一、中村 泰明、早川 美加、峯山真由美、宮尾 弘子、 宮本 正守、向山 久、渡辺 由美		
整理調査員	青木 善子、市川ちず子、鳥羽 徳子、半田 純子		
整理事業員	飯島 早苗、清水さゆり、西尾 千枝、待井かおる、宮島 恵子、三好 明子		
重機等現物提供元	株式会社フージャースコーポレーション（本体工事請負業者 米山建材株式会社）		
遺構測量業務委託	株式会社写真測図研究所		
地質学指導・石材鑑定	長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館 研究員 田辺 智隆		

2 調査日誌抄

令和4年

- 12月12日(月) 重機による表土除去作業開始(～12月14日)
- 12月15日(木) 作業員雇用開始(～令和5年1月20日) A・B区遺構検出
- 12月16日(金) A区遺構掘り下げ開始 B区掘削完了 写真撮影
- 12月21日(水) A区南東(SB1周辺) 掘削完了 写真撮影
- 12月22日(木) A区南東、B区遺構測量
- 12月23日(金) A区南東、B区結線作業 B区調査終了
- 12月26日(月) A区南側重機掘削 遺構検出
- 12月28日(水) 令和4年作業終了

令和5年

- 1月5日(木) 令和5年作業開始
- 1月12日(水)、13日(木) 遺構測量
- 1月18日(水) 遺構測量・空撮
- 1月19日(木) 結線作業 重機トレンチ掘削による中央部、北部下層確認
- 1月23日(月) 重機トレンチ写真撮影 測量 作業員作業終了 機材撤収
- 1月24日(火) 結線作業
- 1月25日(水) 重機埋め戻し作業開始
- 1月30日(月) 井戸解体に伴う記録作業 調査終了



写真2 重機による表土除去作業



写真3 作業員による検出作業



写真4 作業員による遺構掘削



写真5 調査区全景(南西から)

第2章 調査地周辺の考古学的環境

権堂腰巻遺跡(1)は善光寺の南約1km、権堂商店街のアーケードの南に位置する。裾花川河岸段丘と湯福川扇状地の複合扇状地上に立地し、南方向に緩やかに傾斜する傾斜地となっている。砂礫を地盤とする水はけのよい沖積土壌と、日当たり良好な南向きの緩斜面という条件から、古くから居住に適した環境であったことが想定される。

本遺跡が属する長野遺跡群ではこれまでの調査で縄文時代から近世までの遺跡が確認されている(図5)。

縄文時代には、中期から集落の痕跡が認められるようになる。旭町遺跡(2)、西町遺跡(3)で当該期の遺構が検出されている。旭町遺跡では東北系、関東系の土器やタカラガイ形土製品が出土しており、広範な交易が想定される。

弥生時代には前期末から遺跡が認められるようになる。新諏訪町遺跡長野西高校調査地点(5-1)では弥生時代前期末から中期前葉の新諏訪町式土器が出土しており、長野盆地における稲作到来期の遺跡として注目される。県町遺跡(6-2・6-3・6-4)、後町遺跡(7-1・7-2)、西町遺跡、東町遺跡(4)では弥生時代中期後半の栗林式期の遺構が確認されている。特に県町遺跡では大溝が確認されており、環濠を伴う集落が存在した可能性が考えられる。また、東町遺跡では「戈を持つ鳥装の祭人」を描いた栗林式土器の壺が出土しており、西日本の農耕祭祀の伝播を示す資料として注目される。弥生時代後期には千曲川流域を中心に分布する箱清水式土器の標識遺跡である箱清水遺跡(8)が確認されている。新諏訪町遺跡救護施設地点(5-2)では箱清水式土器と北陸系の法仏・月影式土器の良好な共伴関係が明らかとなった。

古墳時代には、新諏訪町遺跡(5-2)で古墳時代前期初頭の遺構が検出された。西町遺跡では前期から後期にかけて、元善町遺跡(9-1)では古墳時代前期、県町遺跡(6-1)では古墳時代中期後半から後期にかけて、善光寺門前町跡(10-1)・立町遺跡(11)では古墳時代後期の遺構がそれぞれ確認されている。長野遺跡群の周辺には西長野古墳群(12)や花岡平古墳群(13)が存在し、上記の各遺跡との関連が想定される。

奈良・平安時代には、県町遺跡、旭町遺跡、西町遺跡、東町遺跡、元善町遺跡、立町遺跡で遺構が確認されている。県町遺跡の国際会館地点(6-1)では、掘立柱建物跡の柱穴内から蹄脚硯の破片が出土し、周辺に水内郡の郡衙が存在した可能性が指摘されている。また、県町遺跡マンション建設地点(6-2)では円面硯の脚部と須恵器双耳杯が出土し、後町小学校地点(6-3)でも須恵器稜碗や「厨」墨書土器、片庇掘立柱建物跡が確認されるなど、一般集落では見られない要素が多くあり、郡衙の存在を裏付ける資料と評価される。元善町遺跡(9-1)では古代瓦が多量に出土し、その中には湖東式軒丸瓦や桶巻き作りの平瓦が見られ、8世紀代には付近に瓦葺きの建物が存在していた可能性が指摘されている。

中近世には、善光寺参道の門前町が発達し、西町遺跡、元善町遺跡、善光寺門前町跡(10-1~3)で善光寺門前町に関連する遺構が確認されている。西町・東町遺跡では中世前期門前町の区画溝や堅穴建物等が検出されたほか、貿易陶磁、古瀬戸、渡来銭等が出土している。また、元善町遺跡(9-2)では中世善光寺の造成の痕跡が確認されている。このほか、調査地周辺の台地上、山上に南北朝時代から戦国時代にかけての山城である横山城跡(14)や葛山城跡(15)、大黒山城跡(16)等が築造された。

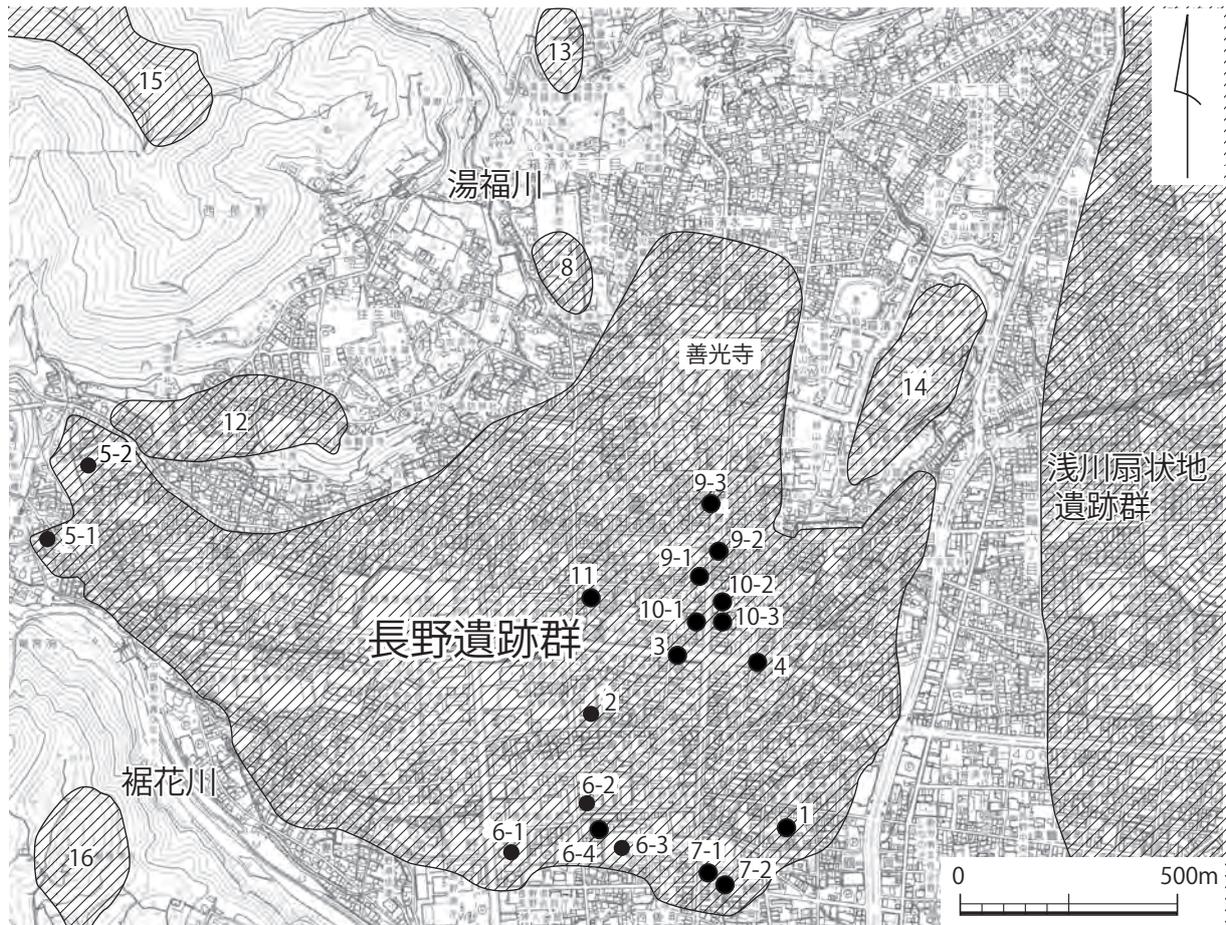


図5 調査地周辺の遺跡 (1 : 17,500)

1 権堂腰巻遺跡 2 旭町遺跡 3 西町遺跡 4 東町遺跡 5-1 新諏訪町遺跡長野西高校調査地点 5-2 新諏訪町遺跡救護施設地点 6-1 県町遺跡国際会館地点 6-2 県町遺跡マンション建設地点 6-3 県町遺跡後町小学校地点 6-4 県町遺跡北野建設地点 7-1 後町遺跡賃貸住宅地点 7-2 後町遺跡県庁緑町線地点 8 箱清水遺跡 9-1 元善町遺跡善光寺大本願明照殿建設地点 9-2 元善町遺跡仁王門東地点 9-3 元善町遺跡善光寺仲見世通りガス管布設工事地点 10-1 善光寺門前町跡竹風堂善光寺大門口地点 10-2 善光寺門前町跡八幡屋磯五郎大門口店建設地点 10-3 善光寺門前町跡店舗併用住宅地点 11 立町遺跡 12 西長野古墳群 13 花岡平古墳群 14 横山城跡 15 葛山城跡 16 大黒山城跡

【参考文献】

- 清水竜太 2020 「資料紹介長野遺跡群東町遺跡から出土した絵画土器について」
『長野市埋蔵文化財センター所報』No31 (長野市教育委員会)
- 長野県 1982 『長野県史』考古資料編主要遺跡 (北・東信)
P468～471 県町遺跡 (国際会館地点) P196～199 新諏訪町遺跡 (長野西高校調査地点)
- 長野市 1997 『長野市誌』第1巻自然編
- 長野市 2000 『長野市誌』第2巻歴史編原始・古代・中世
- 長野市教育委員会 1998 『長野遺跡群西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
- 長野市教育委員会 2006 『長野遺跡群善光寺門前町跡』長野市の埋蔵文化財第115集
- 長野市教育委員会 2008 『長野遺跡群元善町遺跡・善光寺門前町跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第121集
- 長野市教育委員会 2009 『長野遺跡群元善町遺跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第123集
- 長野市教育委員会 2014 『長野遺跡群善光寺門前町跡 (3)』長野市の埋蔵文化財第135集
- 長野市教育委員会 2016 『長野遺跡群善光寺門前町跡 (4)』長野市の埋蔵文化財第142集
- 長野市教育委員会 2017 『長野遺跡群県町遺跡』長野市の埋蔵文化財第147集
- 長野市教育委員会 2018 『長野遺跡群新諏訪町遺跡』長野市の埋蔵文化財第149集
- 長野市教育委員会 2018 『長野遺跡群県町遺跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第151集
- 長野市教育委員会 2021 『長野遺跡群県町遺跡 (3)』長野市の埋蔵文化財第157集
- 長野市教育委員会 2021 『長野遺跡群後町遺跡』長野市の埋蔵文化財第158集
- 長野市教育委員会 2022 『長野遺跡群立町遺跡』長野市の埋蔵文化財第162集

第3章 調査成果

第1節 発掘調査の概要（図6～9）

調査に際しては、試掘調査の成果をもとに、遺物包含層残存範囲のうちマンション建物建設予定地をA区、駐輪場建設予定地をB区として調査区を設定した（図6）。調査区北側の受水槽建設予定地（C区）は、掘削途中でガス管が確認されたことから掘削を中止した。実質調査面積はA区が469 m²、B区が37 m²である。調査区内における基本土層は表土層－褐灰色土層－灰黄褐色土層（平安時代の遺物包含層）－黄褐色土層である。遺物包含層以下の土層は場所によって堆積状況に差異が認められる。調査にあたっては地表下約70 cmを検出面（平安時代）と判断し、重機掘削を実施した後人力による精査を行った。以下、各区の概要を述べる。

A区で検出した遺構の総数は竪穴建物跡8軒、溝跡3条、土坑8基、小穴13基、井戸跡2基である。竪穴建物跡は2軒を除き重複して確認され、年代は屋代編年古代2期から3期（7世紀末から8世紀中葉）のものが2軒、古代7期から8期（9世紀中葉から末）のものが5軒、古代15期（11世紀後半）のものが1軒である。このうち7軒の竪穴建物跡でカマドが検出され、北側に付設されるものが5軒、東側に付設されるものが2軒である。B区では、木根、近現代建物による攪乱の影響が大きく、A区に比べて遺構は少ない。検出した遺構は小穴3基（SP1～3）のみである。小穴は近接して存在する。SP1は長軸40 cm、短軸33.6 cm、深さ10.4 cmである。SP2は径25 cmの円形で深さは8 cmである。SP3は長軸36 cm、短軸25 cm、深さ9.6 cmである。小穴は遺物が出土していないため時期等の詳細は不明である。

土層確認のために調査区内に設定した東西トレンチ（図9）等では、検出面の下層から古墳時代の須恵器（134）や箱清水式土器（135）等の奈良時代よりも古い時代の土器が出土したため、下層に遺構面が存在する可能性を考慮してA区の中央部と北壁沿いに東西方向のトレンチを入れて下層確認を行った（図7中央トレンチ、北トレンチ）。下層確認では、中央トレンチ、北トレンチ双方において、奈良時代から平安時代の検出面の下層で古墳時代後期の遺物包含層を確認した（図8）。北トレンチの遺物包含層は西への傾斜が認められ、同様の傾斜が東西トレンチや調査区南東部に設定した複数のトレンチでも確認されたことから、調査区内の南北方向に古墳時代後期の地形変換点である傾斜ライン（図7）が存在すると考えられる。なお、中央トレンチの遺物包含層は東部で若干の傾斜が認められるものの、西側は水平に近い堆積であり、若干様相が異なるが詳細は不明である。この傾斜は古墳時代後期以降次第に埋没していき、奈良時代には居住に適した平坦な地形が形成されたと考えられる。検出面下層で出土した土器は、傾斜の埋没前に周辺から流入したものであると推測される。下層確認において遺構等は検出されていない。

地表で確認されている近現代井戸Aについても調査を行った（図7）。井戸は直径1.1 mの円形を呈し、深さは約13 mを測る。切石積で築かれていることから近世以降の年代が想定され、当地で明治期に創業した料亭「富貴楼」の井戸であると考えられる。なお、調査で検出された攪乱のほとんどは「富貴楼」建物の基礎である（図9）。また、中央トレンチの壁面では、近現代井戸B（図7）が確認されている。



図6 調査区設定図

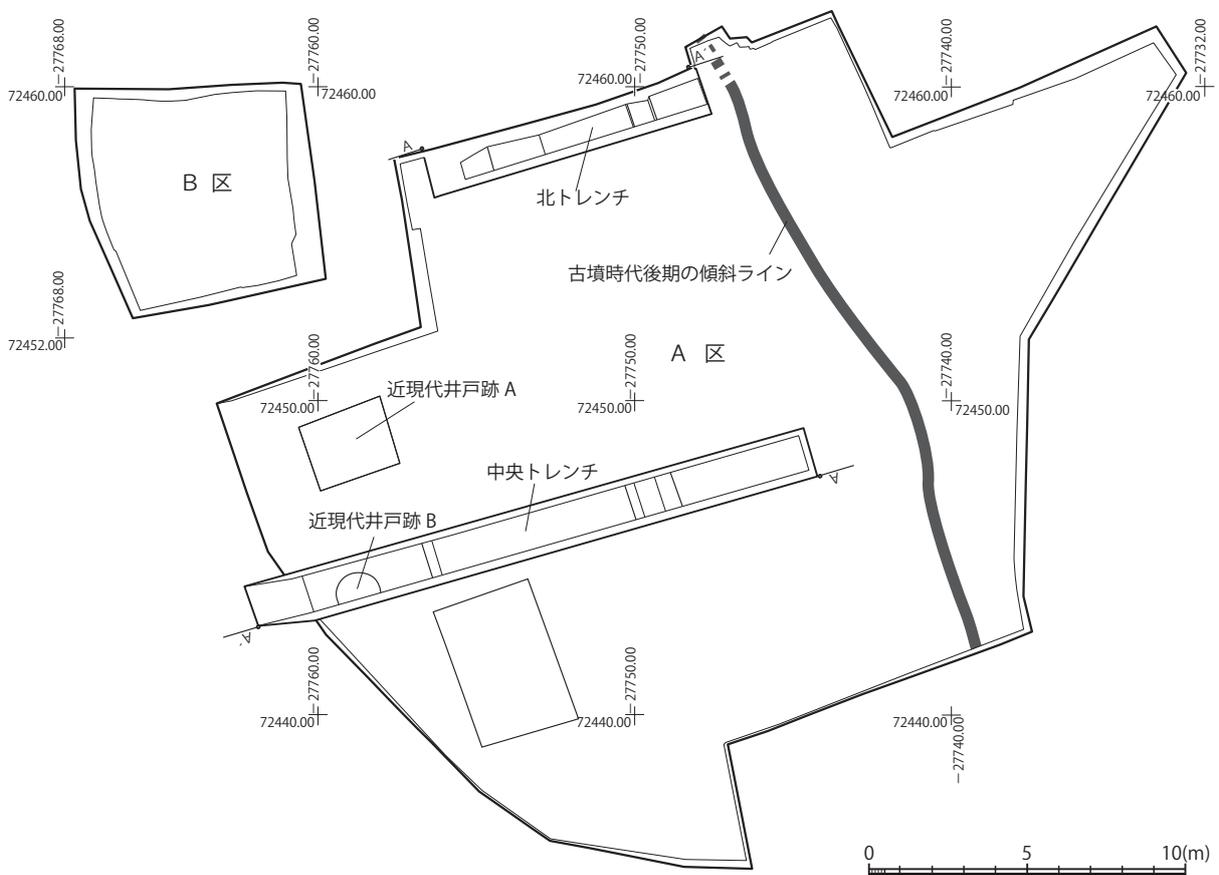
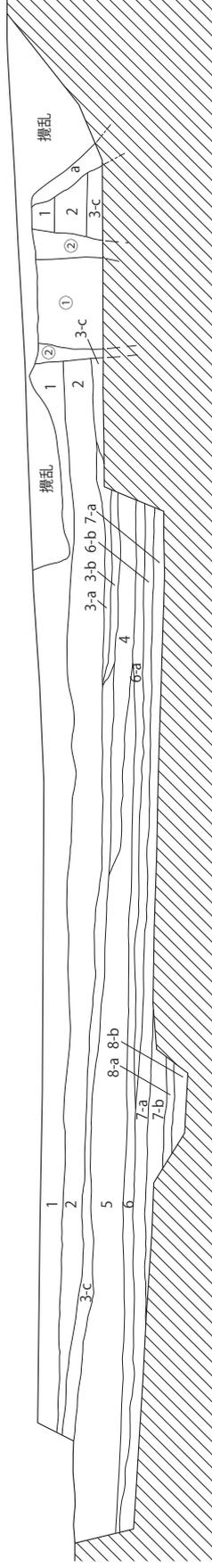


図7 下層確認トレンチ設定図 (1:240)

中央トレンチ土層堆積状況

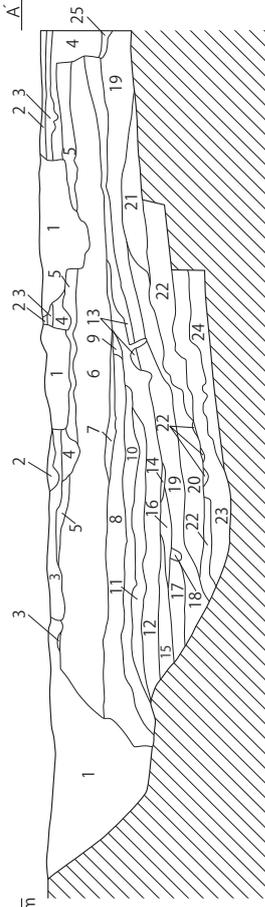
367.00m
A



- 1. 10YR6/6 明黄褐色粘質土 粘性あり、しまりに欠けボソボソする 炭化粒・焼土粒・土器片含まない 2層に比べ明るい、粘性弱い
- 2. 10YR5/4 黄褐色粘質土 粘性あり、しまりに欠けボソボソする 炭化粒・焼土粒・土器片含まない 1層に比べ暗く、粘性強い
- 3-a. 10YR6/4 黄褐色粘質土 粘性非常に強い、しまりあり 3-c層に比べ強粘性
- 3-b. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 粘性非常に強、しまりあり 3-c層に比べ粘性強
- 3-c. 10YR3/4 暗褐色粘質土 2層に比べ粘性・しまり強 3-a・b層に比べ粘性弱い 西側になるに従って色調が褐色から橙色に変わる 6世紀の須恵器杯出土 古墳時代後期の包含層
- 4. 10YR6/4 黄褐色粘質土 粘性・しまり非常に強い、5層と同質であるが粘性が強くくなる。
- 5. 10YR7/8 黄褐色粘質土 粘性は3-c層に比べ弱く、ボソボソする 鉄分斑文あり 植物、管状の周囲に鉄分集積あり 上層で箱清水式土器の蓋・壺出土 焼土・炭化粒はなく、包含層とは考え難い
- 6-a. 10YR4/1 褐灰色粘質土 5層より粘性・しまり強 歌生土器(蒸林式)出土
- 6-b. 10YR3/1 黒褐色粘質土 6-a層に比べ暗く、粘性・しまり強
- 7-a. 5層と同質
- 7-b. 10YR5/4 黄褐色シルト 粘性弱、柔らかくしまりに欠ける
- 8-a. 10YR6/4 黄褐色シルト 粘性弱、柔らかくしまりに欠ける
- 8-b. 10YR6/4 黄褐色粘質土 粘性弱、しまりに欠ける
 - a. 5B65/1 青灰色粘土 グライ化
 - ①5B65/1 青灰色粘土 粘性・しまりあり グライ化 砂粒を含むが粘質 出土遺物なし 近現代井戸跡
 - ②10YR6/2 灰黄褐色粘質土 1・2層より粘性・しまりあり 地山 裏込めか?

北トレンチ土層堆積状況

367.00m
A



- 1. 近現代擾乱
- 2. 10YR4/1 褐灰色シルト質土 グライ化している
- 3. 10YR1/1 褐灰色シルト質土 鉄分集積層が上下に確認される
- 4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 褐色粒を多分含む 平安時代の包含層
- 5. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 黄褐色シルト質土 黄褐色土粒を多分に含む
- 6. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 7. 10YR1/3 黒褐色シルト質土 褐色粒を多分に含む
- 8. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 9. 10YR1/3 黒褐色シルト質土 褐色粒を疎らに含む
- 10. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 植物由来の褐灰色土ブロック・炭化物を疎らに含む
- 11. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 12. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 黄褐色土粒を多分に含む
- 13. 10YR2/3 黒褐色シルト質土 黄褐色土粒を疎らに含む 古墳時代後期の包含層
- 14. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 灰褐色粒を多分に含む
- 15. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 褐色粒・植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 16. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 褐色粒を疎らに含む
- 17. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 褐色粒・植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 18. 10YR4/3 黄褐色粘質土 褐色粒を疎らに含む
- 19. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 20層と同質の層であるが13層の影響を受ける。
- 20. 10YR4/3 黄褐色シルト質土 植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む
- 21. 10YR4/4 褐色シルト質土 白色粒・植物由来の褐灰色土ブロックを微量含む
- 22. 10YR2/3 黒褐色粘質土 黄褐色土ブロックを疎らに含む
- 23. 10YR4/3 黄褐色粘質土 植物由来の褐灰色土ブロックを微量含む
- 24. 10YR4/4 褐色粘質土 褐色粒・植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む

図8 下層確認トレンチ土層図 (1:80)

第2節 遺構

1 竪穴建物

SB1 (図版1、遺構写真図版2)

調査区南東部で検出された。他の竪穴建物跡が重複していることが多いのに対し、SB1はやや離れた位置で単独で確認された。東側を近現代の攪乱に、北西隅をSK4に、南西隅をSK3に切られている。南北3.8m、東西残存長2.4mを測り、方形を呈すると思われる。検出面から床面までの深さは15～20cmである。覆土は暗褐色シルト質土層の単層であり、覆土中に黄褐色粒・炭化物をまばらに含む。

北壁に突出部が確認されている。カマドの可能性があるが、被熱痕は確認できなかった。また、北西隅のSK4の周辺では床面で被熱した痕跡が確認されている。床面ではP1～5の5基の小穴を検出した。このうちP1、2、4は最初SB1と切合う単独の土坑として調査したが、最終的にSB1に付属する小穴と判断した。遺構名もSK5をP4に、SK7をP1に、SK8をP2に変更し、SK5、7、8は欠番とした。P1は長軸80cm、短軸残存部44cm、深さ6cmで東側を近現代攪乱に切られる。P2は長軸68cm、短軸残存部42cm、深さ30cmで東側を近現代攪乱に切られる。P2の覆土からは土師器片が1点と30cm大の礫片が1点出土した。P3は直径20cmの円形で深さ10cmである。P4は長軸86cm、短軸46cm、深さ20cmである。P5は長軸50cm、短軸20cm、深さ7cmである。遺構南側の床面では炭化物が分布し、土器がまとまって出土している。土器は口径9cm、器高2cmの土師器杯が主体的に出土し、出土遺物の様相から屋代編年古代15期、11世紀後半に比定される。

SB2・3 (図版1、遺構写真図版2)

調査区北部中央で検出された。2軒の竪穴建物が重なる。カマド燃焼部や周辺炭層のレベルは、SB2がSB3より6cmほど高い。土層と切合関係からSB4(古)→SB3→SB2→SK6(新)と判断した。

SB2は、主軸をN-81°-Eにとり、南北3.8m、東西推定3mの隅丸方形を呈する。検出面から床面のまでの深さは15～20cmである。付属施設はカマドと小穴2基(P1、P2)である。カマドは東壁南寄りに付設され、カマド奥壁が壁面外に張り出す、いわゆる箱型である。煙道は確認できなかった。被熱面上に灰白色灰、その上位に黒褐色炭層が堆積し、奥壁から25cmの位置に支脚石の抜き取り痕が認められた。カマド周辺からは、カマド袖石材および粘土構築材は検出されなかった。SB2No1角礫はSB3床面硬化面の6cm上位に位置し、SB2床面の礫と想定される。P2がカマド袖石の抜き取り痕、No1角礫が構築石材の可能性もある。P1はカマドの右側に掘り込まれる。カマド周辺の床は堅緻で、カマド前面と南壁周辺に薄い炭層の堆積が認められた。

SB3は、主軸をN-14°-Eにとり、南北3.9m、東西3.4mの隅丸方形を呈する。床面で南東コーナーが確認できたためプランが明らかとなった。検出面から床面のまでの深さは約35cmである。床面は非常に硬くしまった硬化面がカマド前面から中央部に広がり、水平な床面を明瞭に検出することができた。付属施設はカマドと小穴3基(P1、P2、P3)である。カマドは北壁東寄りに付設される。袖芯材に石材を用いる石組みカマドで、壁外に60cm延びる煙道とともに検出された。建物廃絶時に天井部および袖の粘土材は取り払われ、石材、支脚石、遺棄された土器が確認された。石材は安山岩系の長方形角礫を用い、片側に3枚ずつ立てている。焚口側の石材は床面より10cmほど深く埋置し、他の2枚は焚口の1枚と壁面の間に充填している。袖芯材の高さは、焚口が一番低く、煙道に向かって高くなっていく。奥壁の角礫Aは煙道を塞ぐために壁際に置かれたもので、1個体が2つに割れている。本来は焚口の天井部であったものと思われる。カマド周囲およびP2からは被熱した角礫が出土しており、石芯材の隙間に充填して袖を構築していたことが窺われる。カマド奥壁被熱面は、袖立石より8cm上位で、カマド天井は袖立石より高い構造となる。カマド奥壁には径17cmの掘り抜き煙道があり、

煙道底部はカマド床面より 10 cm 高く、外部に向かって斜位に立ち上がる。カマド支脚石は棒状の川原石を打ち欠いて平坦面を作り、カマド奥壁より 10 cm 内側に位置する支脚穴に埋置されていた。被熱面は、支脚石の手前側に 40×35 cm の楕円形を呈し、その上位には 5~8 cm ほど灰・炭化粒が堆積し、土器が遺棄されていた。カマド廃絶時に天井部は取り払われ、袖石や支脚石は原位置のまま残し、被熱面上位を覆うかたちで支脚石の前に土師器椀と黒色土器杯（25・27）が正位の状態で置かれ、その周囲を甕破片（44、46）によって支脚石を覆い隠すように敷き詰めていた。カマドの土器は土師器が主体で、軟質須恵器（20）、灰釉陶器（21）も認められた。小穴はカマドの右側で検出されている。床面精査時には、床面直上の炭層がピット内に落ち込む様子が看取された。P1 からは土器片が、P2 からはカマド構築材と考えられる被熱角礫が土器片とともに出土した。カマド前面には炭層が広がっていた。南西床面では、50×70 cm 大の楕円形を呈する炭層の広がりが認められ、3 cm ほどの窪みに炭化物が堆積し、床面は硬化していた。床面直上からは石製巡方（142）と刃先を西に向けた刀子（139）が近接して出土した。また、床面から 4 点の川原石（No1~4 川原石）が出土している。

出土遺物の様相から、SB2・3 とともに屋代編年古代 8 期、9 世紀後半から 9 世紀末の年代に比定される。SB2・3 の重複する箇所出土した遺物は、所属が不明な場合があり、遺物が交じり合っているとみたい。その場合は「SB2・3」と注記した。各竪穴建物に確実に伴うものは、カマド内、カマド右側ピット内、床直 No 遺物である。遺物観察表を参照されたい。

SB4（図版 1、遺構写真図版 2）

調査区北西部で検出された。SB2、SK6、SD1 に切られている。SB4 は、試掘時に第 8 トレンチの土層断面に床面が確認された。主軸を N-17° -W にとり南北 3.9~4.2 m、東西 4.3 m の隅丸方形を呈する。カマドが付設される東壁側がやや狭いプランとなる。検出時のカマド奥壁上面と被熱面との差は 30 cm である。壁面周辺の床面に暗赤褐色焼土粒を含む黒褐色炭層が広がっていたため、プランを明瞭に検出することができた。ただし、炭化材は出土せず、床面は被熱硬化していない。小穴 P3~P5 は支柱穴で、SD1 に切られている範囲にも支柱穴があったものと思われる。支柱穴は径 40~45 cm、深さ 15~20 cm を測る。

カマドは東壁中央に付設されている。天井部は壊され、袖の下部が検出された。被熱面は径 50 cm ほどの円形であり、床面より 5 cm ほど低く、その前面はピット状を呈し、掻き出された灰が広がっていた。被熱面の上部には 5 mm 大の炭化物、黄褐色ブロック、焼土粒の混合土とともに須恵器大形甕片や赤褐色系の須恵器片が遺棄されていた。奥壁および内壁は奥壁部分が暗赤褐色、内壁部分が明赤褐色に被熱している。支脚石は長さ 15 cm を測る川原石で、奥壁から 15 cm 内側に位置し、被熱面から 6 cm 出るように埋置されていた。建物内から袖石材は出土せず、粘土構築カマドであった可能性がある。カマドの左右には小穴 P1、2 がある。P2 上には炭層が広がり須恵器（56）が逆位に、須恵器（58）が正位の状態で出土した。断面は U 字状を呈し深さは 40 cm を測る。覆土から土器片の出土はない。P1 は底面が平坦で、深さは 20 cm を測る。覆土からは土師器甕、須恵器杯の破片が出土した。

遺物は、SB4 と SK6、SD1 との接合関係が認められ、SK6・SD1 の覆土からは SB4 に認められる赤褐色系の須恵器破片が出土している。SD1、SK6 出土の須恵器は SB4 の遺物であった可能性が高い。出土遺物の様相から、屋代編年古代 2 から 3 期、7 世紀最末から 8 世紀中葉の年代に比定される。

SB5（図版 2、遺構写真図版 2・3）

調査区南部で検出された。SB8 と重複する。新旧関係では、SB8（古）→SB5（新）となる。主軸を N-17° -W にとり、南北 2.9 m、東西 4 m の隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは約 30 cm である。覆土は黄褐色粘質土の単層であり、覆土中に褐色粒・炭化物をまばらに含む。柱穴・貼床・周溝などは検出され

なかった。

北壁東寄りにカマドが敷設される。奥壁が建物壁面から外側に突出するいわゆる箱型カマドである。天井部及び袖部は壊されており、土器片を含む炭化物・焼土粒の混合土が堆積していた。被熱面は径 35 cm ほどの円形を呈し、その前面には径 50 cm の範囲が若干の凹みとなり灰の掻き出し痕跡を示していた。袖部推定範囲では礫片が確認されて、石材芯カマドであった可能性が考えられる。また、被熱面のより奥壁側に支脚の抜き取り痕を確認したが、支脚は残されていなかった。

カマド被熱面付近では土器がまとまって出土している。土器は黒色土器が主体的で、軟質須恵器が出土した。出土遺物の様相から屋代編年古代 7 期、9 世紀中葉から後半の年代に比定される。

SB6 (図版 2、遺構写真図版 3・4)

調査区北東部で検出され、遺構の一部は調査区外に及ぶ。主軸は N-22° - W で、南北 2.9 m、東西 2.9~3.4 m の隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは約 28 cm である。東側で SD2、中央で SD3 が重複する。土層堆積状況から、本遺構は SD2、SD3 よりも新しいと考えられる。建物跡の覆土は西壁隅に黒褐色や黄褐色粘土が観察できるが、ほぼ単層であり、ブロック状粘土で混成されたにぶい黄褐色粘土であった。覆土中には橙色粒・炭化物を少量含む。柱穴・貼床・周溝などは検出されなかった。

付属施設は石組みカマドと小穴 2 基である。カマドは北壁西寄りに付設される。石組みを粘土で被覆した状態が良好に残され、内壁は被熱により硬化していた。支脚は西寄りで、石組みとともに地中に約 10 cm 埋設されていた。使用された礫は安山岩系の河原石で、焚口上部に架設された角礫のみが裾花凝灰岩と判明した。袖石に架けていたとみられるが、西側が落下した状態で検出された。カマド前面には焼土と炭化粒が分布し、カマドから掻き出したものと想定される。煙道は下半が良好に残存し調査区外へと続く。P1 は直径 56 cm の円形で、深さ 12 cm である。P2 は長軸 84 cm、短軸 72 cm の楕円形で、深さ 12 cm である。いずれの小穴も土器が出土し、覆土や床面の出土遺物と接合している。建物跡南東隅では 40 cm 大の河原石が 2 点出土した。使用痕跡など認められず、建物機能時のものか、流入かは不明である。

本遺構の所属時期は出土遺物の様相から屋代編年古代 7 期、9 世紀中葉から後半の年代に比定される。

SB7 (図版 2、遺構写真図版 3)

調査区南部で検出された。SB8 と重複し、新旧関係では、SB8 (古) → SB7 (新) となる。検出時、カマド被熱面で竪穴建物の存在が推定され、北壁は明瞭に検出でき、床面から追うことによってプランが明らかとなった。床面にはカマド前面から中央部にかけて炭層が薄く広がっており、床面が明瞭に判別できた。

主軸を N-14° - W にとり、南北 3.3 m、東西 2.7~3.1 m の隅丸方形を呈する。北壁が南壁に対してやや狭い。カマドは北壁に付設される。検出時のカマド被熱面と煙道検出面の差は 25 cm である。覆土はにぶい黄褐色粘質土の単層で、鉄製品 (用途不明) が 1 点出土した。

カマドは暗赤褐色に被熱した煙道が明らかとなり、袖や天井部は取り払われ片づけられていることが判明した。覆土内からカマド構築材の石材は検出されなかった。煙道上部は削られ下半のみが残存していたが、径 20 cm の円形を呈すると思われる。燃焼部赤褐色被熱面は、径 50 cm ほどの不整形を呈する。カマド周辺では径 1 m 程の不整形円形に床面より 4 cm ほど深い落ち込みが見られ、落ち込み内には 5 mm~1 cm 大の明赤褐色粒を含む炭層が 2~4 cm 堆積し、土器片を含んでいた。やわらかく締まりはない。カマドの灰などを掻き出した痕跡と想定される。支脚とその抜き取り痕は明らかではない。

付属施設としてカマドの右側に小穴 (P1) が検出された。70×60 cm の隅丸長方形を呈し、深さは 45 cm である。内部より土器片が出土している。

出土土器の様相から屋代編年 8 期、9 世紀後半から 9 世紀末の年代に比定される。

SB8 (図版 2、遺構写真図版 3)

調査区南部で検出された。東側が調査区外にかかる。SB5・7 と重複し新旧関係では SB8 (古) →SB5・7 (新) となる。SB5 の床面精査中、カマド壁面上部が明らかとなり、竪穴建物を検出した。

SB8 は主軸を N-5° -W にとり、南北 3.1 m、東西 3 m 以上を測り、北壁に付設されたカマドから推定すると、東西が南北に対して長い隅丸長方形プランを呈するものと思われる。煙道は確認できなかった。カマド検出面から被熱面までの深さは 24 cm である。覆土は単層で、地山と同質である。

床面硬化面は、カマド前面から中央部にかけて広がっていた。床面の状況は、時期が異なるが SB3 床面と同質である。床面から土器は出土せず、建物廃絶時に残された土器片はカマド周辺でのみ出土している。南東部床面直上では径 30 cm、厚さ 8 cm 大の扁平な川原石が出土した。

カマドは燃焼部が壁面外に方形に突出する、いわゆる箱型カマドで、赤褐色に被熱した奥壁のみが残存していた。カマド内部および周辺からは被熱礫等の石材は検出されていない。被熱面は 40×35 cm ほどの楕円形を呈し、その前面には 40×50 cm の範囲が若干のへこみとなり灰の掻き出し痕跡を示していた。また、被熱面より奥壁側に支脚の抜き取り痕が確認できたが、支脚は残されていない。カマドの上部には、炭層、赤褐色粘土ブロックや炭化粒を含む混合土が堆積し、須恵器破片や土師器破片などが一括して出土した。

出土土器の様相から屋代編年古代 2 期、7 世紀最末から 8 世紀前半の年代に比定される。

2 溝、土坑

SD1 (図 8、図版 3、遺構写真図版 4)

調査区中央を東西 (N-76° -E) に貫く溝で、調査区西側に起点があり、調査区東側で攪乱に切られている。起点周辺は、調査区西側を南北に貫く現用水路との交点付近であり、明治期に掘削されたと想定される掘り抜き井戸周辺にあたる。SD1 は、SB4、SD2、3 を切り、古代の遺構より新しい。明治時代に建築された料亭「富貴楼」の基礎 (図 8 中の近現代基礎 A) はこの溝を切っている。よって、「富貴楼」構築以前の遺構である。

溝は中央で切れた形状を呈するが、本来は連続していたと考えられる。溝の長さは東西 21.5 m 以上、溝幅 1 ~2 m、深さ 60 cm を測る。底面の標高は東側で 366.11 m、西側で 366.24 m を測り、西から東に向けて低くなる様子が看取できるが、溝幅の広い中央部が標高 365.82 m で最も深い。溝の断面は基本的には U 字状を呈し、底面は平坦である。しかし、溝幅の広い中央最深部付近は、底面や側面に凹凸があり、底面は地山である明黄褐色粘質土を掘り込んでいる。覆土は灰褐色粘質土をベースとして地山の明黄褐色粘質土ブロックを含み、縞状に水平堆積している。灰褐色粘質土には鉄分斑紋が認められ、滞水した状態が想定される。埋土の状況は、SK6・9 と類似し、形態も中央最深部付近では類似する。

遺構の時期については、切合関係、覆土の状況から古代以降の溝であると考えられる。SB4 周辺の SD1 覆土からは須恵器破片が出土しているが、SB4 の遺物が混入したものであろう。

SD2 (図版 3、遺構写真図版 4)

調査区中央を SD3 と並行して南北方向に走り、SB6 に切られる。幅 1.7 m、深さ 1 m を測る。深さ 80 cm に段を持つ漏斗状の断面形である。覆土は植物由来の褐色粒を含み、滞水していた可能性が考えられる。遺物が出土していないため、時期等の詳細は不明であるが、切合関係から 9 世紀中葉から後半より前に掘削されたものと考えられる。

SD3 (図版 3、遺構写真図版 4)

調査区中央を SD2 と並行して南北方向に走り、SB6 切られる。幅 0.4 m、深さ 12 cm を測る。遺物が出土していないため時期等の詳細は不明であるが、切合関係から 9 世紀中葉から後半より前に掘削されたものと考えられる。

SK1 (図版 3、遺構写真図版 4)

調査区東側で検出された。長軸 0.68 m×短軸 0.6m の楕円形のプランを呈し、深さは 8 cm を測る。覆土は褐灰色シルト質土の単層で、黄褐色粒、炭化物を含む。遺物は出土しておらず、時期等の詳細は不明である。

SK2 (図版 3、遺構写真図版 5)

調査区東側で検出された。長軸 0.88 m×短軸 0.66m の楕円形のプランを呈し、深さは 20 cm を測る。SK9 を切る。覆土は灰黄褐色シルト質土層の単層で褐色粒、炭化物を含む。遺物は出土しておらず、時期等の詳細は不明である。

SK3 (図版 3、遺構写真図版 4)

調査区南東部で検出された。長軸 1.6 m×短軸 0.98m の不整形のプランを呈し、深さは 24 cm を測る。掘り込みは西側が急で東側がなだらかとなる。SB1 を切り、南東側を近現代の攪乱に切られている。出土遺物の様相から屋代編年古代 15 期、11 世紀後半の年代に比定される。

SK4 (図版 3、遺構写真図版 5)

調査区南東部で検出された。長軸 0.56 m×短軸 0.54m の不整形のプランを呈し、深さは 24 cm を測る。覆土は褐灰色粘質土の単層で、黄褐色粒をまばらに含む。SB1 を切っており、平安時代以降の年代が想定される。

SK9 (図版 3、遺構写真図版 5)

調査区南東部で検出された。長軸 1.67 m、短軸不明の不整形のプランを呈し、深さは 9 cm を測る。SK2、SP4、SP5 に切られる。遺物の出土は無く、時期等の詳細は不明である。

SK6・10 (図版 4、遺構写真図版 5)

調査区北西部で検出された。切り合いの前後関係はつかめなかったが、同質な覆土からほぼ同時期に埋没したものとする。覆土は SD1 と類似する。

SK6 は、長軸 3.8 m、短軸 1.4 m の楕円形を呈し、深さ 40～60 cm の船底状底部の一方に径 1.5 m ほどの円形掘り込みをもつ。覆土は灰褐色粘質土、灰黄褐色粘質土が水平に互層となる。ほそほそとしており締まりに欠け、鉄分斑紋がある。覆土の様子は SD1 と類似し、鉄分斑紋の様子から滞水していた状態であったと想定される。SB3、4 を掘り込んでおり、両者より新しい。

SK10 は、南北 1.9 m 以上、東西 2 m の不整形のプランを呈し、底面は平坦で深さは 50 cm を測る。深さ 30 cm 位で壁面に段があり、この位置から下層に炭層の堆積が認められた。炭層の分布範囲は南北 1.5 m、東西 1.6 m の不整形で厚さ 0.5～1 cm である。被熱面は紫褐色に弱く、硬化面はない。遺物は出土していない。

SK6 西側、SK6・10 検出面付近から鉄器 (141) と須恵器片が出土したが遺構に伴うものではない。

SK11 (図版 3、遺構写真図版 5・6)

調査区北東部で検出された。SD2・3 の東に位置し、北側は調査区外に及び、東側は近現代の攪乱に切られている。長軸残存長 2.1 m、短軸残存長 1.1 m、深さ 90 cm を測る。断面は台形状を呈すると推定され、覆土は炭化物・獣骨を含み、底部付近で須恵器を中心とする土器が集中して出土している。出土遺物は屋代編年古代 1 期、7 世紀後半から末、古代 4 期、8 世紀後半の 2 相が確認されている。出土土器の年代に一定の幅があることから、比較的長期にわたる遺構と考えられるが、性格等は不明である。

第3節 遺物

SB1 (図版5・9)

土器破片 2,273 kg と鉄製品（刀子）が出土し、うち土器 14 点、刀子 2 点（137・138）を図化した。これらの遺物は遺構南側で集中して出土している。土器は土師器が主体である。1～12 が土師器で、1～8 が杯、9 が高台を持つ皿、10・11 が椀、12 が盤である。8 は P2 の覆土内から出土した。杯は大型のもの（6）と小型のものが見られ、小型のものは口径平均が 9 cm、器高平均が 2 cm であり、器高 1 cm 台のものが一定数見られる。13・14 は黒色土器の杯か椀である。内面に黒色処理が施される。

小型の土師器杯の量から屋代編年古代 15 期、11 世紀後半の年代に比定される。

SB2 (図版5・9)

土器破片 1,998 kg と土錘が出土し、うち土器 5 点、土錘 1 点（136）を図化した。食膳具は黒色土器が主体的であり、土師器が伴う。15 は黒色土器杯である。内面に黒色処理が施される。16～19 は土師器である。16 は皿、17・18 は砲弾甕、19 が小型甕である。

出土土器の様相から屋代編年古代 8 期、9 世紀後半から 9 世紀末の年代に比定される。

SB3 (図版5・6・9)

土器破片 7,142 kg、鉄製品、石製巡方が出土し、うち土器 28 点、鉄製品 2 点（139・140）、石製巡方 1 点（142）を図化した。20・21・25・27・36・40～42・44・46 はカマドから、23・26・32～35・37・39・43・45・47 は P1 から、24・38 は P2 からの出土である。

食膳具は黒色土器が主体的であり、土師器、須恵器、灰釉陶器が伴う。20 は軟質須恵器杯である。黒斑が見られ、底部は回転糸切りによる切り離しが行われる。内面が被熱し、炭化物の付着が見られる。21・22 は灰釉陶器皿である。共に三日月形の高台を持ち、21 は刷毛塗り、22 は漬け掛けにより施釉されている。光ヶ丘 1 号窯式～大原 2 号窯式に相当するものと考えられる。23～26、41～47 は土師器で、23・24 が皿、25・26 が椀、43 は小型甕、41・42、44～47 は砲弾甕である。27～40 は黒色土器で、27～35 が杯、36～39 が椀、40 が片口鉢である。いずれも内面に黒色処理が施される。139・140 は刀子である。142 は石製巡方で、石英閃緑岩製であり、裏側に 4 カ所の潜り穴が穿孔されている。139・142 は近接した箇所出土している。

黒色土器が土師器よりも多く、土師器皿や灰釉陶器の様相から屋代編年古代 8 期、9 世紀後半から 9 世紀末の年代に比定される。

SB2・3 (図版6)

SB2、3 の重複部から出土した遺物のうち、所属する遺構が判別できなかったものをここで掲載する。

土器破片 1,940 kg が出土し、うち 8 点を図示した。48、49 は灰釉陶器椀である。三日月形の高台を持ち、刷毛塗りにより施釉されている。光ヶ丘 1 号窯式に該当するものと考えられる。50・51 は土師器杯である。52～55 は黒色土器であり、52～54 が杯、55 が盤である。いずれも内面に黒色処理が施される。

SB4 (図版6・7)

土器破片 7,252 kg が出土し、うち土器 13 点を図化した。土器は須恵器が主体的であり、他に土師器が出土している。56～65 は須恵器で、56～58 が内面にかえりを持たない杯蓋、59～61 が杯、62・63 が高台杯、64・65 が甕である。56～58・59・62・64 は赤褐色系の個体である。56・57 は折り返し部が外に向かって折り返される個体である。59～61 は底部回転ヘラ切りによる切り離しが行われ、59・61 は火嚢が見られる。62・63 の高台部はともに外端接地であり、62 の高台底面には溝状のくぼみが見られ、底部外面には糸切りの痕跡がわずかに残

る。66～68は土師器甕である。

出土遺物の様相から屋代編年古代2から3期、7世紀最末から8世紀中葉の年代に比定される。

SB5 (図版7)

土器破片 2,684 kg が出土し、うち土器 8 点を図化した。70～73、75・76 はカマドからの出土である。土器は黒色土器が主体であり、他に須恵器、土師器が出土している。69 は須恵器杯蓋である。つまみを持ち、赤褐色系の個体である。70・71 は軟質須恵器杯である。底部は回転糸切りによる切り離しが行われる。72・73 は黒色土器で、72 が杯、73 が鉢である。内面に黒色処理が施されている。74～76 は土師器甕である。

食膳具に土師器がなく、黒色土器に一定量の須恵器が伴うことから、屋代編年古代7期、9世紀中葉から後半の年代に比定される。

SB6 (図版7)

土器破片 4,897 kg が出土し、うち土器 7 点を図化した。土器は黒色土器が主体であり、他に須恵器、土師器等が出土している。79 はカマド内部から、81・82 は P1、77・80・83 は P2 からの出土である。77 は軟質須恵器杯である。底部は回転糸切りによる切り離しが行われている。78・79 は黒色土器杯で、内面に黒色処理が施されている。80～83 は土師器である。80 は鉢で、外面に被熱痕が確認されている。在地では見られない土器であり、他地域との交流が想定される。81～83 は砲弾甕である。

食膳具に土師器がなく、黒色土器に一定量の須恵器が伴うことから、屋代編年古代7期、9世紀中葉から後半の年代に比定される。

SB7 (図版8)

土器破片 2,405 kg と鉄製品が出土し、うち土器 10 点を図化した。土器は黒色土器、土師器、灰釉陶器が出土している。88・89・91～93 はカマド内部からの出土である。84 は灰釉陶器碗である。内外面に施釉され、角高台である。黒粒を含む猿投窯特有の胎土で、黒笹 14 号窯式から黒笹 90 号窯式に相当するものと考えられる。85～87 は黒色土器杯である。いずれも内面に黒色処理が施される。88～93 は土師器で、88 は碗、89 は杯、90 は高台を持つ皿、91 は鉢、92・93 は甕である。88 は底部に高台が取れた痕跡が見られる。

出土遺物の様相から屋代編年8期、9世紀後半から9世紀末の年代に比定される。

SB8 (図版8)

土器破片 1,358 kg が出土し、うち土器 6 点を図化した。94・95・98・99 はカマド内部から出土した。土器は須恵器が主体的であり、他に土師器が出土している。94～97 は須恵器である。94 は内面にかえりを持たない杯蓋、95 は杯、96・97 は高台杯である。95 の底部は回転ヘラ切りで、底部内面には火襻が見られる。96・97 の高台はともに内端接地であり、96 の高台底面には溝状のくぼみが見られる。98 は黒色土器杯である。内面に黒色処理が施される。99 は土師器鉢である。内外面にハケ状工具による調整が行われている。

須恵器杯に回転糸切りによる切り離しが行われる個体がなく、高台杯の高台が全て内端接地であることから、屋代編年古代2期、7世紀最末から8世紀前半の年代に比定される。

SK3 (図版8)

土器破片 471 kg が出土し、うち土器 4 点を図化した。土器は土師器が主体である。100～102 が杯、103 が盤である。杯は大型のもの(102)と小型のもの(100・101)の2者が見られ、小型のものは口径平均が 9.1 cm、器高平均が 2.1 cm を測る。

小型の杯の法量から屋代編年古代15期、11世紀後半の年代に比定される。

SK6 (図版8)

土器破片 1,987 kg が出土し、うち土器 5 点を図化した。104～107 は須恵器で 104 が杯蓋、105～107 が杯である。104・107 は赤褐色系の個体である。105 の底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われる。108 は土師器甕である。

出土遺物の様相から屋代編年古代 2 期～3 期、7 世紀最末～8 世紀中葉の年代に比定される。年代は SB4 と同じ時期であり、SK6 の掘削時に SB4 内部の土器が混入したものと考えられる。

SK11 (図版 9)

土器破片 1,726 kg が出土し、うち土器 24 点を図化した。土器は須恵器が主体であり、他に土師器、黒色土器が出土している。109～123・126・129～131 は須恵器で、109・110 が杯蓋、111～118 が杯、119～123 が高台杯、126 が高杯、129・130 が壺、131 が甕である。109 は古墳時代からの系譜をひく杯蓋である。110 は口縁端部を折り返すタイプの蓋で、折り返し部は外反する。口縁端部は凸状に調整される。杯は、113・118 は回転ヘラ切りにより切り離しが行われ、それ以外は回転糸切りによる切り離しである。回転糸切りによる切り離しが行われる杯の内部底径の平均は 8.1 cm であり、屋代編年古代 4 期の平均値 7 cm 大～8 cm 大の範囲にある。115 の底部外面には墨書が確認されている。高台杯の高台は 119・120 が平面接地に近い外端接地、121～123 が平面接地である。129 は肩部に屈曲を持つ長頸壺である。124・125 は黒色土器杯で内面に黒色処理が施されている。127・128・132 は非ロクロ土師器鉢、133 は砲弾甕である。

出土遺物の年代は屋代編年古代 1 期、7 世紀後半から末 (109、126～129、132) と、屋代編年古代 4 期、8 世紀後半の 2 相が見られ、後者の方が量が多い。

遺構外 (図版 9)

遺構外出土の遺物として土器 2 点、鉄製品 1 点を図示した。134 は須恵器蓋杯である。受け部に比して立ち上がり部が長い猿投系のもので古墳時代後期の年代が想定される。SD3 の下層からの出土である。135 は箱清水式土器蓋である。内面にススが付着し、天井部中央に穿孔が見られる。東西トレンチ内、検出面下層からの出土である。141 は SK6 付近の検出面で出土した鉄製品である。薄型の長方形を呈し、返りと思われる部分が確認できることから鎌と思われる。

【参考文献】

齊藤孝正・後藤健一 1995 『須恵器集成図録』第三巻東日本編 I

鳥羽英継 2000 「第 4 章第 1 節 3 善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の土器編年 (3 世紀後半～11 世紀後半)」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡)』「総論編」長野県埋蔵文化財センター調査報告書 54 (長野県埋蔵文化財センター)

長野県埋蔵文化財センター 1999 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡)』「古代 1 編」長野県埋蔵文化財センター調査報告書 42

長野県埋蔵文化財センター 2000 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡)』「古代 2・中世・近代編」長野県埋蔵文化財センター調査報告書 50

長野県埋蔵文化財センター 2000 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡)』「総論編」長野県埋蔵文化財センター調査報告書 54

表1 土器観察表

遺構名	掲載番号	種別	器種	残存率	出土位置	計測 (cm)			調整		
						口径	底径	器高	外面	内面	底面
SB1	1	土師器	杯	1/2	床面	9.3	3.8	2.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	2	土師器	杯	1/2	床面	—	3.8	(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	3	土師器	杯	1/4	床面	10.0	4.4	2.6	回転ナデ	回転ナデ	不明
SB1	4	土師器	杯	2/3	覆土	7.8	4.4	1.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	5	土師器	杯	1/2	覆土	9.1	3.8	1.6	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	6	土師器	杯	1/1	床面	14.8	5.5	5.2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	7	土師器	杯	1/2	床面	—	4.1	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	8	土師器	杯	1/4	P2 覆土	—	4.8	(1.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	9	土師器	皿	1/3	床面	9.5	—	(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	10	土師器	碗	2/3	床面	10.3	4.9	4.0	回転ナデ	回転ナデ	不明
SB1	11	土師器	碗	1/3	覆土	11.3	5.4	4.0	回転ナデ	回転ナデ	不明
SB1	12	土師器	盤	2/3	床面	15.6	7.9	4.6	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB1	13	黒色土器	杯か碗	1/4	床面	12.8	—	(3.7)	回転ナデ	黒色処理	—
SB1	14	黒色土器	杯か碗	1/4	床面	15.6	—	(4.1)	回転ナデ	黒色処理、タテミガキ	—
SB2	15	黒色土器	杯	1/3	No1、床直	12.8	7.1	4.0	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り
SB2	16	土師器	皿	1/5	覆土	13.8	5.7	1.7	回転ナデ	回転ナデ	—
SB2	17	土師器	甕	1/8	覆土	19.7	—	(7.9)	回転ナデ	回転ナデ	—
SB2	18	土師器	甕	1/4	SB2・3、覆土	12.8	—	(6.2)	回転ナデ	ナデ、ヨコナデ	—
SB2	19	土師器	小型甕	2/3	SB2・3、SB3 カマド、床直	9.0	6.2	8.9	回転ナデ、 二次被熱 下端ケズリ、	回転ナデ	回転糸切り
SB3	20	軟質須恵器	杯	1/1	カマド	12.5	5.2	3.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB3	21	灰釉陶器	皿	1/4	カマド	14.4	6.8	3.1	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付
SB3	22	灰釉陶器	皿	1/3	床面、SK6	14.0	5.7	2.9	回転ナデ	回転ナデ	高台貼付
SB3	23	土師器	皿	2/3	P1	13.0	4.8	2.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB3	24	土師器	皿	1/4	P2	12.0	3.8	2.6	回転ナデ	回転ナデ	不明

遺構名	掲載番号	種別	器種	残存率	出土位置	計測 (cm)			調整			
						口径	底径	器高	外面	内面		底面
										口徑	底徑	
SB3	25	土師器	椀	1/1	カマド	15.6	—	(4.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り	
SB3	26	土師器	椀	1/3	P1	—	8.0	(2.0)	—	—	—	
SB3	27	黒色土器	杯	1/1	カマド	12.4	5.8	4.2	回転ナデ	黒色処理、ヨコミガキ	回転糸切り	
SB3	28	黒色土器	杯	1/2	床面	—	6.6	(3.6)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
SB3	29	黒色土器	杯	1/1	カマド周、P1、 床面、SB2・3	17.2	7.0	(2.0)	ヨコミガキ	黒色処理、ミガキ	ナデ	
SB3	30	黒色土器	杯	1/2	覆土、SB2・3 周検出	16.8	—	(5.0)	回転ナデ→回転ケズリ	黒色処理、ミガキ	—	
SB3	31	黒色土器	杯	1/3	床面	13.2	6.5	4.3	回転ナデ	黒色処理、ヨコミガキ	回転糸切り	
SB3	32	黒色土器	杯	1/7	P1	14.6	—	(4.2)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	—	
SB3	33	黒色土器	杯	2/3	P1	12.8	5.6	4.7	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
SB3	34	黒色土器	杯	1/4	P1	12.8	5.4	4.3	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り→ナデ	
SB3	35	黒色土器	杯	1/7	P1	—	5.2	(1.2)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り	
SB3	36	黒色土器	椀	1/4	カマド	15.2	—	(4.0)	回転ナデ	黒色処理、ヨコミガキ	不明	
SB3	37	黒色土器	椀	1/2	P1、SB2覆土、 SB2・3	16.5	8.8	6.0	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付	
SB3	38	黒色土器	椀	1/4	P2	—	6.2	(2.9)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付	
SB3	39	黒色土器	椀	1/5	P1	—	7.6	(2.3)	回転ナデ	黒色処理	回転糸切り→高台貼付	
SB3	40	黒色土器	片口鉢	1/6	カマド	25.0	—	(11.5)	回転ナデ	黒色処理、ヨコミガキ	—	
SB3	41	土師器	甕	1/4	カマド	—	—	(15.0)	回転ナデ、平行タタキ、二 次焼成	回転ナデ、指押さえ	タタキ、丸底	
SB3	42	土師器	甕	1/10	カマド	—	—	(7.2)	平行タタキ	ナデ、指押さえ、付着物	タタキ、丸底	
SB3	43	土師器	小型甕	1/12	P1	14.8	—	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	—	
SB3	44	土師器	甕	1/4	P3、カマド	22.0	—	(22.0)	回転ナデ、カキメ、タテケ ズリ	回転ナデ、カキメ、指押さ え、スス	—	
SB3	45	土師器	甕	1/8	P1	22.8	—	(10.2)	回転ナデ	回転ナデ	—	
SB3	46	土師器	甕	1/4	カマド	24.0	—	(11.5)	回転ナデ	回転ナデ	—	

遺構名	掲載番号	種別	器種	残存率	出土位置	計測 (cm)			調整		
						口径	底径	器高	外面	内面	底面
SB3	47	土師器	甕	1/12	P1	27.0	—	(10.2)	回転ナデ	回転ナデ	—
SB2・3	48	灰釉陶器	椀	1/2	SB2 カマド前、 SB2B、SB2C、 SB3B 床面	13.7	7.0	4.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB2・3	49	灰釉陶器	椀	1/3	検出面	—	5.6	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB2・3	50	土師器	杯	1/3	検出面	—	6.4	(1.8)	回転ナデ	回転ナデ	不明
SB2・3	51	土師器	杯	1/3	検出面	—	7.0	(0.7)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB2・3	52	黒色土器	杯	1/2	覆土	—	6.7	(2.1)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り
SB2・3	53	黒色土器	杯	1/2	覆土	—	5.1	(1.8)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り
SB2・3	54	黒色土器	杯	1/2	覆土	—	6.0	(0.9)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り
SB2・3	55	黒色土器	盤	1/2	覆土	13.3	6.5	3.6	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	高台貼付
SB4	56	須恵器	杯蓋	1/2	カマド前炭層	16.0	—	3.0	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
SB4	57	須恵器	杯蓋	1/8	検出	18.0	—	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	—
SB4	58	須恵器	杯蓋	1/1	カマド前炭層	18.4	—	5.1	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
SB4	59	須恵器	杯	1/6	床面	14.0	8.8	3.2	回転ナデ、火櫓	回転ナデ	回転ヘラ切り
SB4	60	須恵器	杯	1/8	P1	—	7.0	(2.8)	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
SB4	61	須恵器	杯	1/4	覆土	—	9.8	(2.6)	回転ナデ、火櫓	回転ナデ	回転ヘラ切り
SB4	62	須恵器	高台杯	1/4	検出	—	8.7	(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り→回転ナデ
SB4	63	須恵器	高台杯	1/16	検出	—	12.4	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
SB4	64-1	須恵器	甕	1/6	床面	—	—	(15.9)	平行タタキ	ナデ	—
SB4	64-2	須恵器	甕	1/3	検出、床面、 カマド、SB2C	—	—	(18.5)	平行タタキ	ナデ	—
SB4	65	須恵器	甕	1/6	東、SD1	31.4	—	(8.5)	回転ナデ→平行タタキ	回転ナデ	—
SB4	66	土師器	甕	1/12	P1	24.0	—	(5.1)	ハケ→ナデ	ナデ	—
SB4	67	土師器	甕	1/8	床面	13.6	—	(7.1)	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ	—
SB4	68	土師器	甕	1/2	床面	—	8.0	(4.3)	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケ	ケズリ

遺構名	掲載番号	種別	器種	残存率	出土位置	計測 (cm)			調整		
						口径	底径	器高	外面	内面	底面
SB5	69	須恵器	杯蓋	1/2	覆土	—	—	(2.0)	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
SB5	70	軟質須恵器	杯	1/2	カマド東炭	12.9	6.1	3.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB5	71	軟質須恵器	杯	1/2	カマド	13.6	5.3	3.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB5	72	黒色土器	杯	2/3	カマド、カマド	13.1	5.9	3.8	回転ナデ	黒色処理、タテミガキ	回転糸切り
SB5	73	黒色土器	鉢	1/5	カマド、カマド東炭	24.7	8.0	13.3	回転ナデ→ケズリ、カキメ、ヨコミガキ	回転ナデ、黒色処理、ミガキ	ケズリ
SB5	74	土師器	甕	1/2	覆土	8.7	—	(9.6)	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ、ナデ	—
SB5	75	土師器	甕	1/1	カマド	11.8	6.1	12.7	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ	回転糸切り
SB5	76	土師器	甕	1/4	カマド、カマド東、礫下	25.3	—	(16.2)	回転ナデ→タテケズリ	ヨコナデ、カキメ	—
SB6	77	軟質須恵器	杯	1/4	P2、床面	13.8	6.8	3.8	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SB6	78	黒色土器	杯	1/5	床面	15.8	8.0	6.0	回転ナデ、ケズリ	黒色処理、ミガキ	不明
SB6	79	黒色土器	杯	1/2	カマド、床面	15.0	7.0	5.6	回転ナデ、ケズリ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り→ケズリ
SB6	80	土師器	鉢	1/1	P2	22.1	9.0	13.2	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	ケズリ
SB6	81	土師器	甕	1/4	焼土、カマド周床面、P1	21.0	4.4	30.3	回転ナデ、タテケズリ	回転ナデ、カキメ、タテハケ	ケズリ
SB6	82	土師器	甕	1/3	P1、床面	23.2	—	(7.6)	回転ナデ、カキメ	回転ナデ、カキメ	—
SB6	83	土師器	甕	1/6	P2、床面	22.0	—	(5.8)	回転ナデ、カキメ	回転ナデ、カキメ	—
SB7	84	灰釉陶器	椀	1/1	床面	—	7.3	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SB7	85	黒色土器	杯	1/6	覆土	—	6.1	(3.0)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	回転糸切り
SB7	86	黒色土器	杯	2/3	覆土	—	5.5	(1.6)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	ケズリ
SB7	87	黒色土器	杯	2/3	覆土	—	6.8	(3.6)	回転ナデ→ヨコケズリ	黒色処理、ミガキ	回転ケズリ
SB7	88	土師器	椀	1/4	カマド	15.6	7.4	4.7	回転ナデ	ミガキ	不明
SB7	89	土師器	杯	1/6	カマド	14.0	5.8	4.0	回転ナデ、ケズリ、スス	回転ナデ、スス	回転糸切り
SB7	90	土師器	皿	1/6	床面	12.0	—	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	不明

遺構名	掲載番号	種別	器種	残存率	出土位置	計測 (cm)			調整		
						口径	底径	器高	外面	内面	底面
SB7	91	土師器	鉢	1/8	カマド	328	—	(11.6)	回転ナデ→タテケズリ→ミガキ状のナデ	回転ナデ→ミガキ	—
SB7	92	土師器	甕	1/4	カマド	172	—	(7.1)	回転ナデ	回転ナデ、スス	—
SB7	93	土師器	甕	1/6	カマド	214	—	(7.6)	回転ナデ	回転ナデ、スス	—
SB8	94	須恵器	杯蓋	1/3	カマド	18.5	—	(3.1)	回転ナデ→回転ケズリ	回転ナデ	—
SB8	95	須恵器	杯	1/2	カマド	—	6.9	(1.9)	回転ナデ	回転ナデ、火櫛	回転ヘラ切り
SB8	96	須恵器	高台杯	1/3	覆土	14.6	10.7	3.9	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SB8	97	須恵器	高台杯	1/3	覆土	—	10.8	(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SB8	98	黒色土器	杯	1/2	カマド	—	8.5	(3.6)	回転ナデ	黒色処理、ミガキ	ケズリ
SB8	99	土師器	鉢	1/8	カマド	28.5	—	(8.6)	ナデ、ハケ	ハケ、ナデ、ミガキ	—
SK3	100	土師器	杯	1/3	覆土	8.8	5.8	2.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK3	101	土師器	杯	1/2	覆土	9.5	4.2	2.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK3	102	土師器	杯	2/3	覆土	13.5	3.9	4.1	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK3	103	土師器	盤	2/3	覆土	9.5	5.1	2.4	回転ナデ	回転ナデ	不明
SK6	104	須恵器	杯蓋	1/2	覆土	—	—	(2.4)	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
SK6	105	須恵器	杯	1/3	検出面	14.4	8.7	4.3	回転ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り→ナデ
SK6	106	須恵器	杯	1/4	覆土	14.0	—	(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	—
SK6	107	須恵器	杯	1/4	覆土	—	8.0	(1.5)	回転ナデ	回転ナデ	ケズリ
SK6	108	土師器	甕	1/10	覆土	14.0	—	(5.6)	ナデ	ナデ	—
SK11	109	須恵器	杯蓋	1/4	覆土	—	6.0	(1.4)	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
SK11	110	須恵器	杯蓋	1/4	覆土	21.8	—	(2.5)	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
SK11	111	須恵器	杯	1/2	覆土	12.7	5.0	4.2	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK11	112	須恵器	杯	1/1	覆土	12.6	6.2	4.1	回転ナデ、火櫛	回転ナデ、火櫛	回転糸切り
SK11	113	須恵器	杯	1/3	覆土	13.2	5.4	3.7	回転ナデ、火櫛	回転ナデ	回転ヘラ切り
SK11	114	須恵器	杯	1/4	覆土	—	8.0	(3.3)	回転ナデ、火櫛	回転ナデ、火櫛	回転糸切り→ナデ

遺構名	掲載番号	種別	器種	残存率	出土位置	計測 (cm)			調整		
						口径	底径	器高	外面	内面	底面
SK11	115	須恵器	杯	1/2	覆土	—	6.2	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK11	116	須恵器	杯	1/2	北	—	7.2	(1.3)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK11	117	須恵器	杯	1/4	覆土	—	7.8	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK11	118	須恵器	杯	1/2	覆土	—	6.8	(1.8)	回転ナデ→ナデ	回転ナデ	回転ヘラ切り
SK11	119	須恵器	高台杯	1/2	覆土	15.8	9.7	6.7	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り→回転ケズリ
SK11	120	須恵器	高台杯	1/2	覆土	14.4	8.9	7.1	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SK11	121	須恵器	高台杯	1/6	覆土	—	9.0	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SK11	122	須恵器	高台杯	1/2	覆土	—	9.3	(1.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SK11	123	須恵器	高台杯	1/4	覆土	—	9.4	(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	回転ケズリ
SK11	124	黒色土器	杯	1/8	覆土	—	6.6	(2.5)	回転ナデ→ケズリ	黒色処理、ミガキ	ヘラナデ
SK11	125	黒色土器	杯	1/1	覆土	12.8	5.6	(4.4)	回転ナデ→ケズリ	黒色処理、ミガキ	ヘラナデ
SK11	126	須恵器	高杯	1/2	覆土	—	—	(7.6)	回転ナデ	回転ナデ	—
SK11	127	土師器	鉢	1/4	覆土	12.8	4.4	5.4	ナデ	ナデ	ヘラケズリ
SK11	128	土師器	鉢	2/3	覆土	11.5	5.3	8.7	ナデ→ケズリ	ナデ	ナデ
SK11	129	須恵器	壺	2/3	覆土	—	9.3	(11.3)	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	ナデ
SK11	130	須恵器	壺	2/3	11層	—	7.5	(8.9)	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切り
SK11	131	須恵器	甕	1/2	覆土	—	9.4	(15.0)	回転ナデ、平行タタキ、ケズリ	回転ナデ	ナデ
SK11	132	土師器	鉢	1/3	覆土	20.0	—	(15.5)	タテハケ→ミガキ、ヨコナデ	ハケ→ヨコヘラミガキ ヨコナデ	—
SK11	133	土師器	甕	1/6	覆土	23.8	—	(14.6)	回転ナデ→ケズリ	タテハケ→カキメ	—
検出面下層	134	須恵器	蓋杯	1/3	SD3 下層	10.6	—	(4.0)	回転ナデ、回転ケズリ	回転ナデ	—
検出面下層	135	弥生土器	蓋	1/1	東西トレンチ	14.0	—	6.8	ミガキ、天井部穿孔	ミガキ	—

表2 土製品・石製品・金属製品観察表

遺構名	掲載番号	種類	器種	残存率	出土位置	備考
SB2	136	土製品	土錘	1/2	覆土	径1.8 cm、長3.0 cm 重量5.4 g
SB1	137	鉄製品	刀子	1/2	床直上	長9.9 cm、重量14 g
SB1	138	鉄製品	刀子	1/4	床直上	長13 cm、重量16.7 g
SB3	139	鉄製品	刀子	2/3	床面	長16 cm、重量35.6 g

遺構名	掲載番号	種類	器種	残存率	出土位置	備考
SB3	140	鉄製品	刀子	1/4	覆土	長3.4 cm、重量3.2 g
検出面	141	鉄製品	鎌	2/3	SK6 付近	長11.3 cm、重量65.3 g
SB3	142	石製品	巡方	1/1	床面	長3.7 cm、重量19.6 g 色調 N8/8 灰白色 石英閃緑岩、潜り穴穿孔

第4章 まとめ

権堂腰巻遺跡の集落の消長

調査地が属する長野遺跡群の範囲は、平成30年度に実施された後町遺跡の発掘調査に基づき東へ拡張された。権堂腰巻遺跡はその拡張範囲に位置し、今回の調査を受けて新規登録された遺跡である。本調査は権堂地区における初の発掘調査であり、貴重な調査成果を得ることができた。

調査では、おもに7世紀最末から11世紀後半にかけての集落跡が検出された。竪穴建物跡は8軒あり、出土遺物の年代や遺構の新旧関係により、以下の3時期に区分される。

①7世紀最末から8世紀中葉（屋代編年古代2期から3期）－SB4・8

②9世紀中葉から末（古代7期から8期）－SB2・3・5～7

③11世紀後半（古代15期）－SB1

①期は、調査区北西と南で竪穴建物跡が1軒ずつ検出された。SB4は東、SB8は北にカマドが付設され、付設箇所が一致しない。②期は本遺跡で最も竪穴建物跡の軒数が多く、カマドもSB2を除きすべて北に付設され、主軸方位も概ね一致している。重複する竪穴建物跡もあり、継続して竪穴建物が構築されていた状況が窺える。集落の最盛期と考えられる。③期には南東に1軒のみが検出されている。他の竪穴建物跡と異なりカマドが確認されていないが、削平されている東部に付設されていた可能性がある。

①・②期では竪穴建物跡は調査区中央に広く分布するが、③期には南東に1軒のみ見られる。それぞれの時期は1世紀以上の空閑期があり、継続性が見られない。このような傾向は調査地西側に所在する県町遺跡後町小学校地点の平安時代初頭の集落にも見られる傾向で、短期的集落と考えられる。

水内郡衙周辺集落

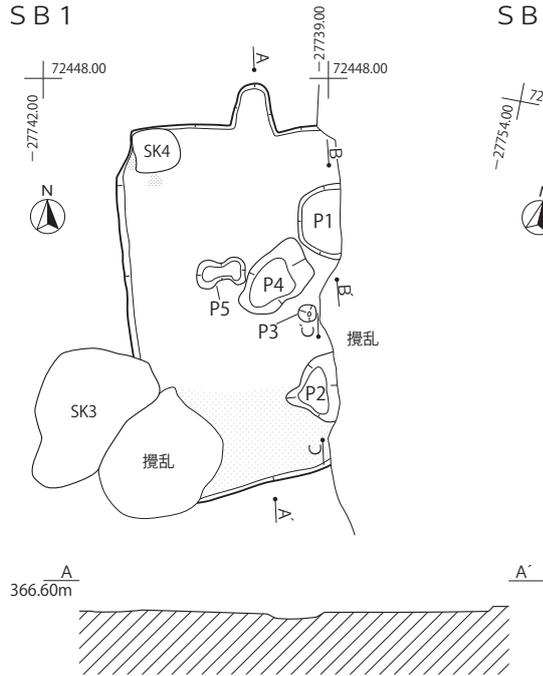
本遺跡の特徴として、本遺跡の西400mに存在する県町遺跡との関連が挙げられる。県町遺跡国際会館地点では蹄脚礎、マンション建設地点では円面礎、双耳杯、後町小学校地点では片庇掘立柱建物跡が検出され、須恵器稜椀、「厨」墨書土器が出土している。これらの出土遺物は官衙関連遺跡での出土傾向が強く、中には郡衙クラス以上に限定される遺物も含まれる。遺物が出土した遺構の時期は8世紀代とされ、県町遺跡は水内郡衙推定地と考えられている。この時期は本調査での①期にあたり、権堂腰巻遺跡の集落は郡衙周辺集落と推定される。①期にはそれを示唆する調査成果は得られていないが、②期にSB3において石製巡方(142)や刀子(139)が出土しており、関連性が推測される。

調査の課題

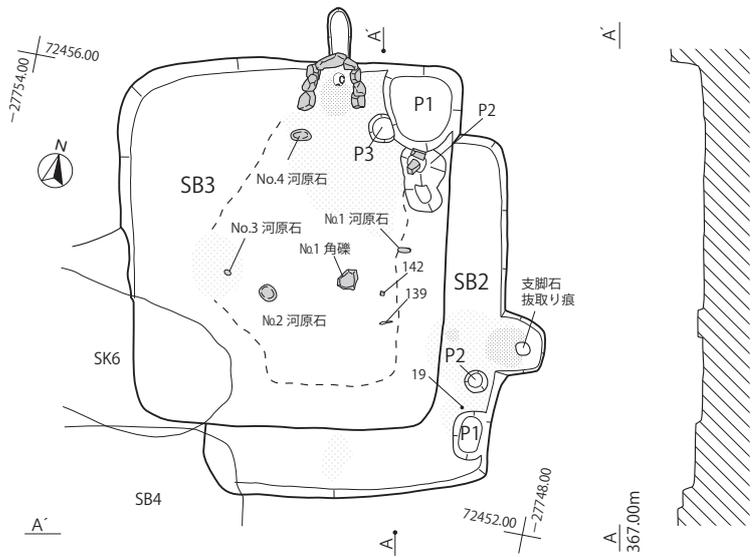
調査では、古代の集落を発見することができたが、一方で溝跡、土坑、小穴について時期や性格が不明な遺構が多く残ってしまった。その中でSD1は遺構の切合関係から中世以降に属すると考えられ、その規模や形状から水路や区画溝に当たる可能性がある。また、SK6・10についても、SD1と覆土が類似することから同時期の遺構の可能性が考えられる。

「権堂」の地名の由来については「金堂」説、「仮堂」説等の複数の説が存在するが、慶長7(1602)年の「信州川中島四郡検地打立之帳」に見られる「権堂村」という表記が初見である。近世初頭に既にその地名が見られることから、中世以前に何らかの施設が存在した可能性も考えられる。今後の調査により解明されることが期待される。

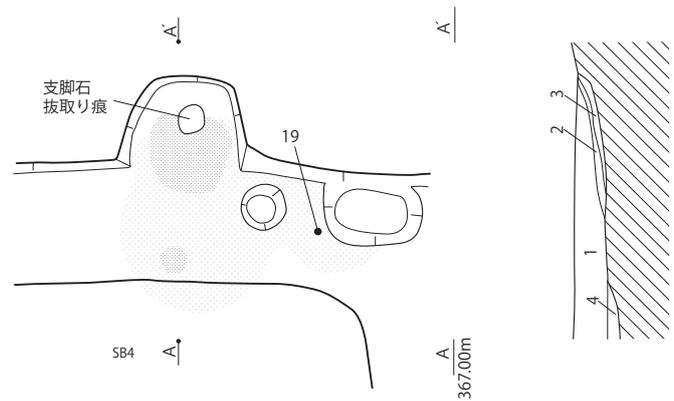
SB 1



SB 2・3

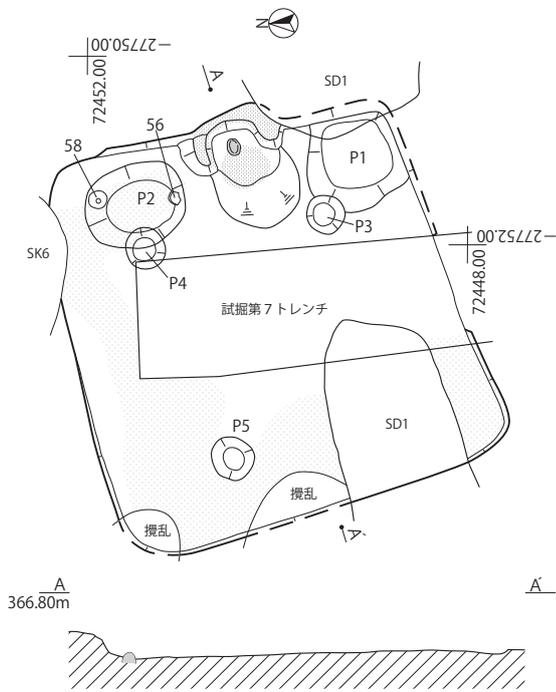


SB 2 カマド (1/40)

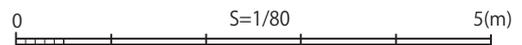
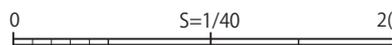
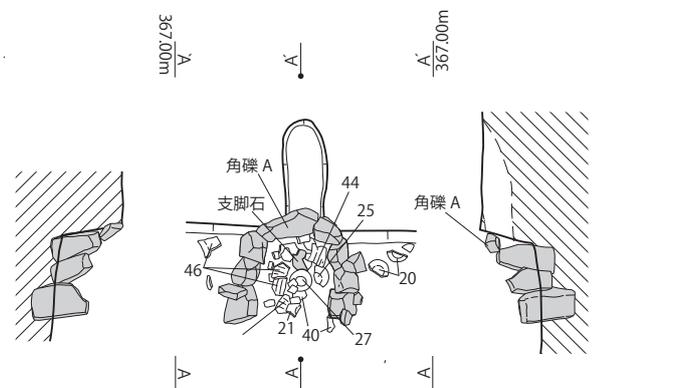


- 1. 10YR5/1 褐灰色粘質土 粘性・しまりあり SB2 覆土
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし 軟らか 炭層
- 3. 10YR7/1 灰白色シルト しまりなし 軟らか 灰層
- 4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 粘性・しまりあり SB4 覆土

SB 4

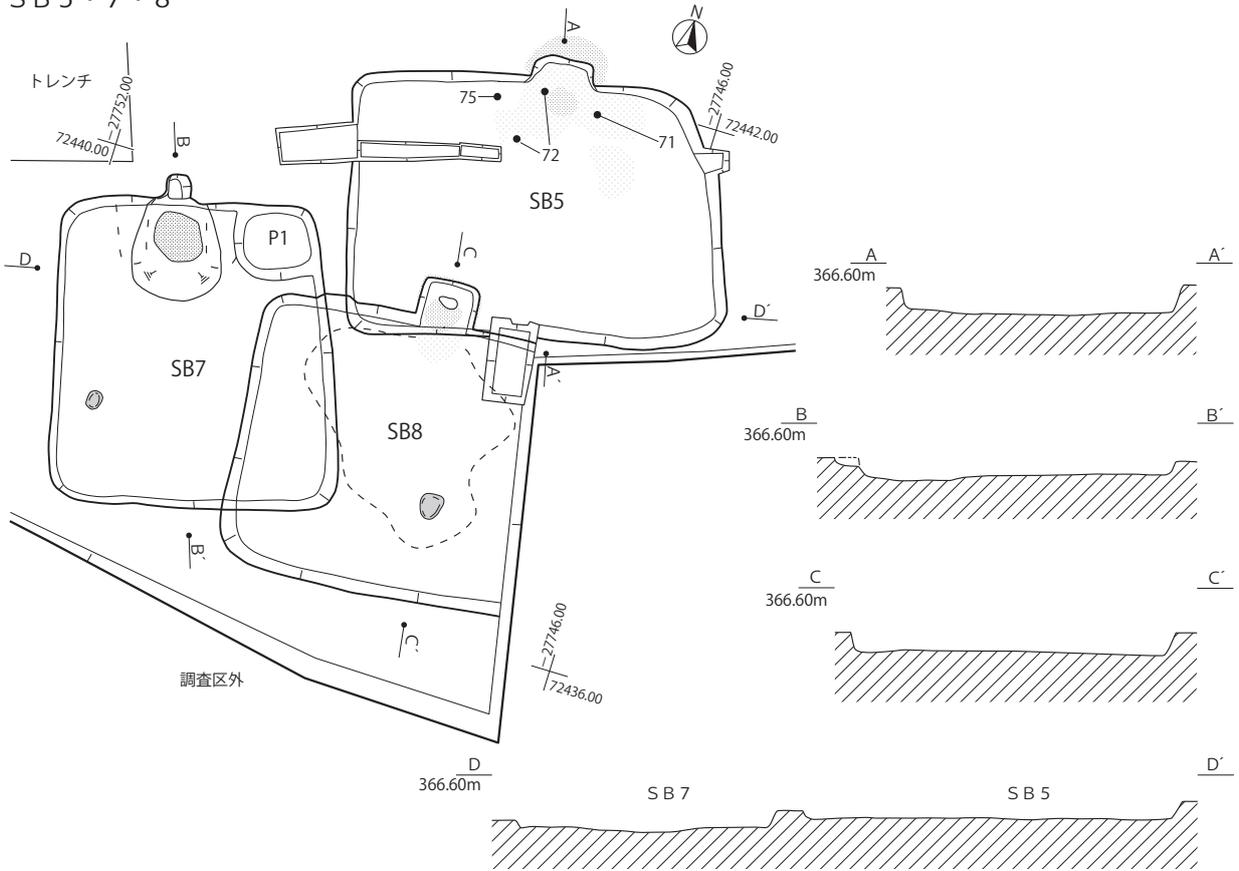


SB 3 カマド (1/40)



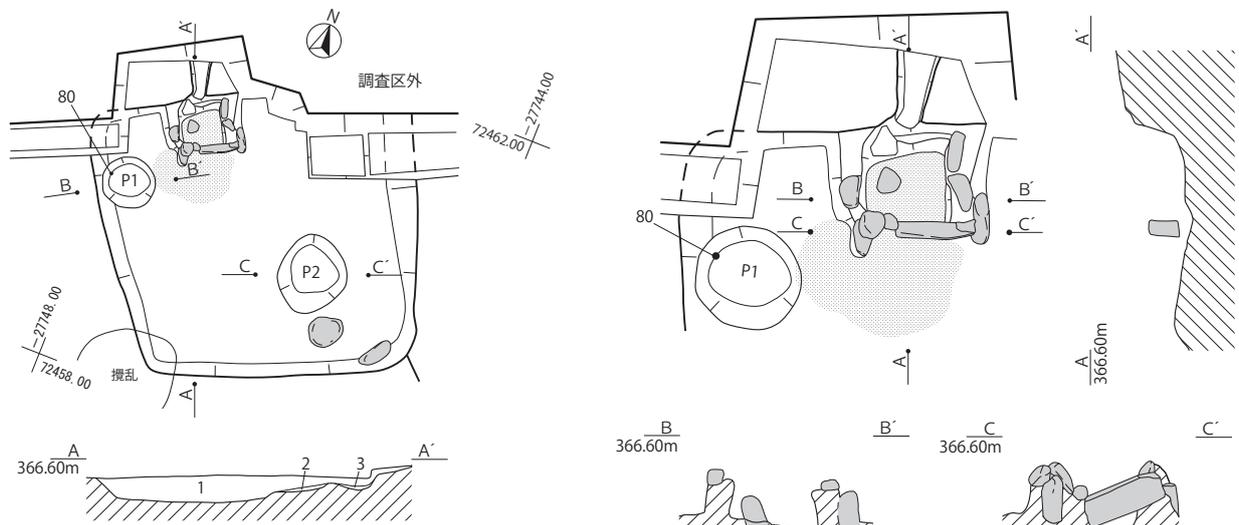
図版2

SB5・7・8



SB6

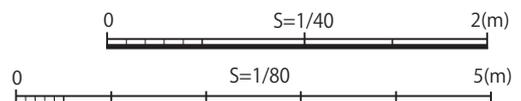
SB6カマド (1/40)



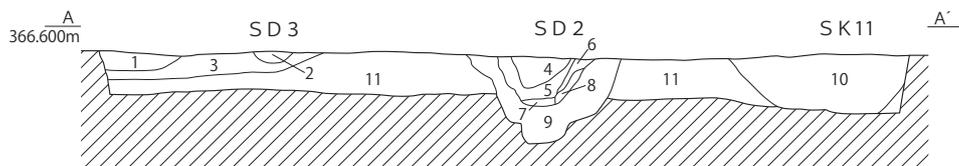
1. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 粘性・しまりあり 橙色粒・炭化物少量 灰色・黄色・暗褐色粘土ブロック混成
2. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土 粘性・しまりあり 焼土・炭化物多量
3. 5YR5/2 灰褐色粘土 粘性なし、しまり強 カマド内部 被熱により硬化



1. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘土 粘性・しまりあり 焼土・炭化物多量

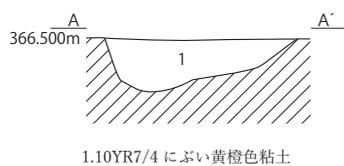


東西トレンチ土層堆積状況 (SD 2・3、SK11)



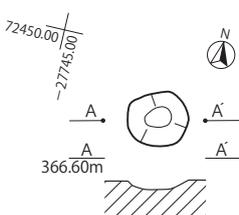
- 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 黄褐色粒を多分に含む
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 褐色粒をまばらに含む SD 3 覆土
- 3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土
- 4. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 植物由来の褐色ブロックを疎らに含む SD 2 覆土
- 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土 褐色粒を疎らに含む SD 2 覆土
- 6. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 褐色粒をまばらに含む SD 2 覆土
- 7. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 SD 2 覆土
- 8. 10YR3/1 黒褐色シルト質土 SD 2 覆土
- 9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 植物由来の褐色ブロックを疎らに含む SD 2 覆土
- 10. SK 11 覆土
- 11. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土 箱清水式土器出土

SD 1

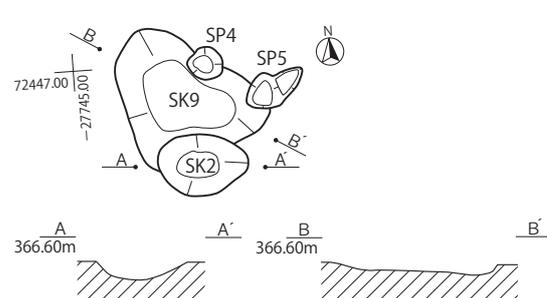


1. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土

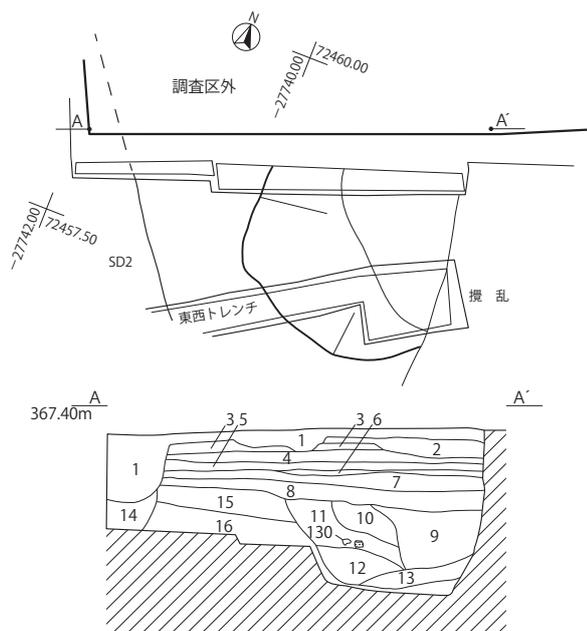
SK 1



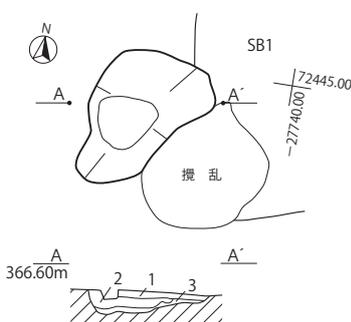
SK 2・9



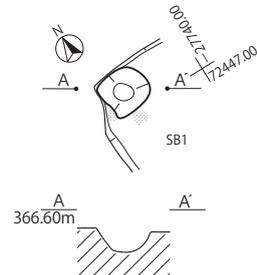
SK 11



SK 3

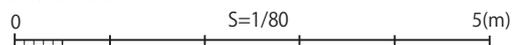


SK 4



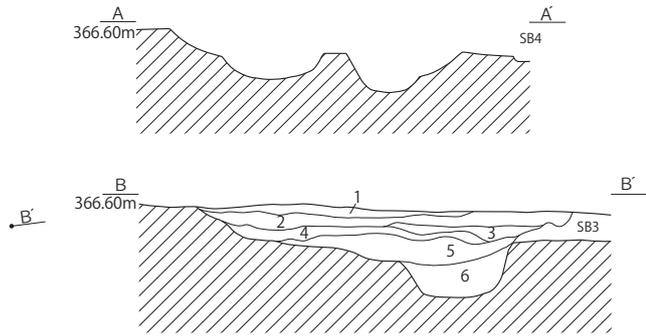
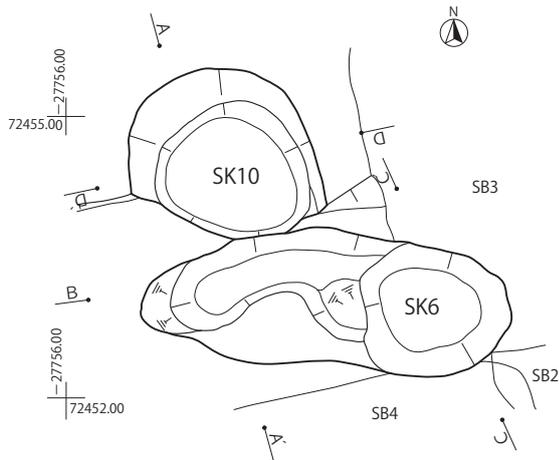
- 1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりやや弱 炭化物・褐色粒疎らに含む
- 2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりやや弱 炭化物・黄褐色ブロックを含む
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 1・2層より しまり強 黄褐色粒を疎らに含む

- 1. 近現代造成土 (砂利層、攪乱層)
- 2. 10YR3/1 黒褐色シルト質土層 褐色粒を疎らに含む
- 3. 10YR3/1 黒褐色シルト質土層 褐色粒を微量含む
- 4. 10YR4/6 褐色粘質土層
- 5. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土層 グライ化層
- 6. 10YR4/4 褐色砂質土層 鉄分集積層
- 7. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土層 褐色粒を疎らに含む
- 8. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土層 黄褐色粒・白色粒・炭化物粒を微量に含む
- 9. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土層 炭化物を微量含む SK11 覆土
- 10. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土層 炭化物を微量含む SK11 覆土
- 11. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土層 炭化物を疎らに含む SK11 覆土
- 12. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土層 炭化物・褐色粒を疎らに含む SK11 覆土
- 13. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土層 底面に鉄分集積層が確認される SK11 覆土
- 14. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 褐色ブロックを疎らに含む SD 2 覆土
- 15. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土層 植物由来の褐灰色土ブロック・黄褐色粒・白色粒・炭化物粒を微量に含む
- 16. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質土層 植物由来の褐灰色土ブロックを疎らに含む

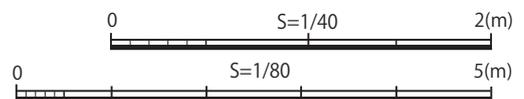
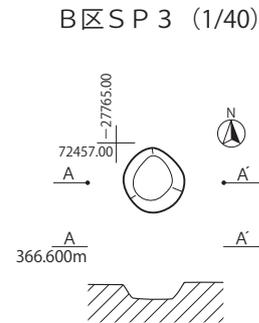
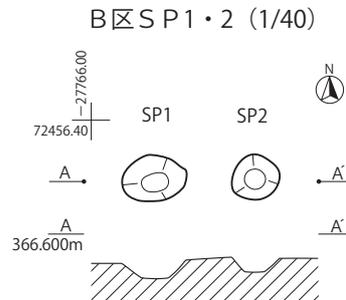
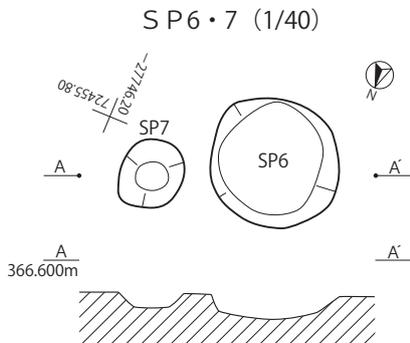
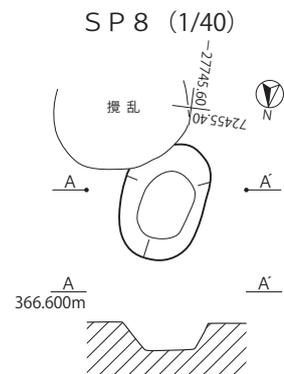
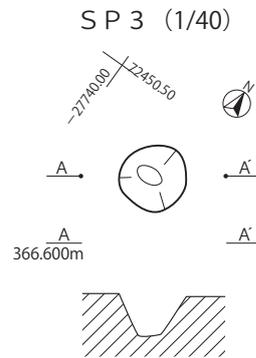
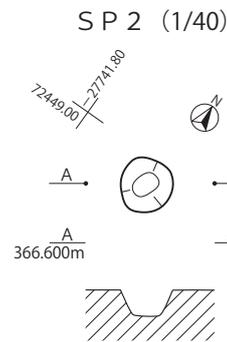
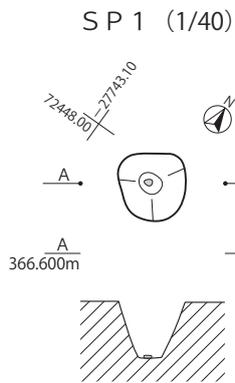
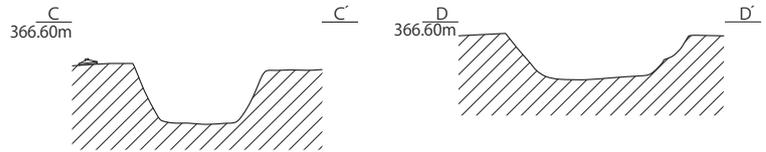


図版4

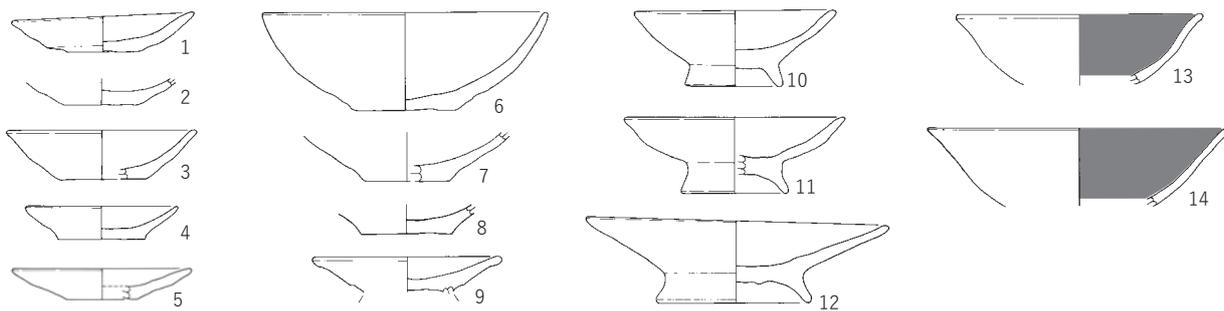
SK6・10



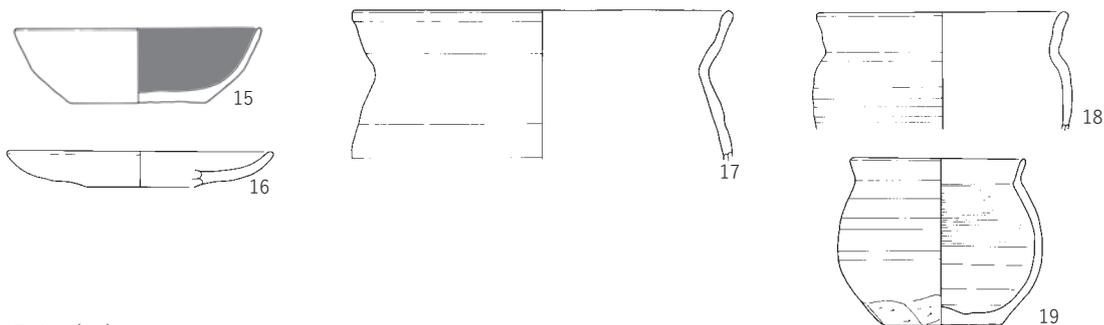
1. 褐灰色 10YR6/1 粘質土 粘性あり、しまりに欠ける 鉄分斑文あり
2. 灰黄褐色 10YR6/2 粘質土 粘性・しまりに欠けボソボソする 鉄分斑文あり 黄褐色土を含む
3. 灰黄褐色 10YR6/2 粘質土 粘性・しまりに欠けボソボソする 鉄分斑文あり
4. 褐灰色 10YR6/1 粘質土 粘性強・しまりあり 1層類似
5. 灰黄褐色 10YR6/2 粘質土 粘性強、3層よりしまりあり 鉄分斑文あり
6. にぶい黄褐色 10YR5/4 粘質土 粘性・しまりあり



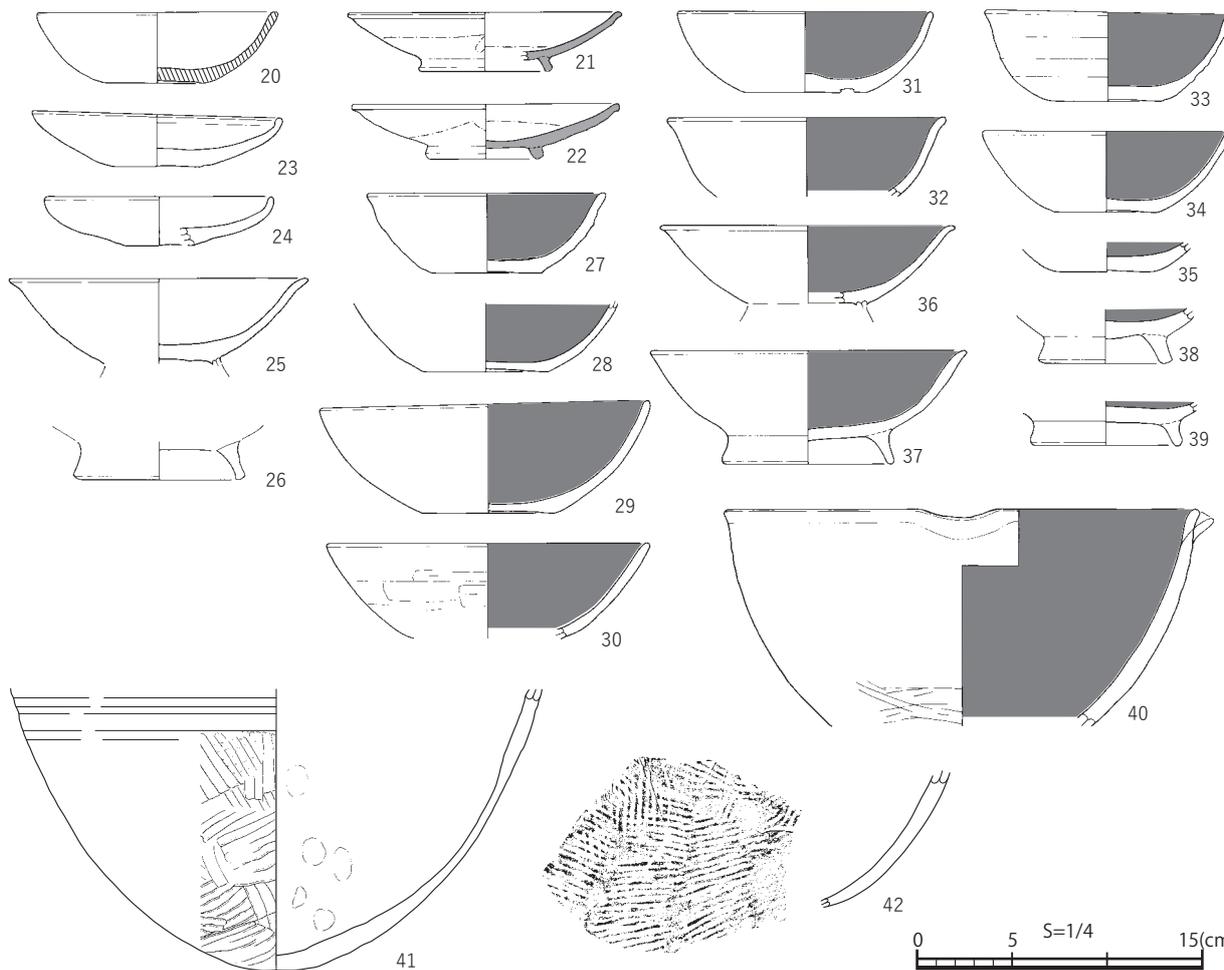
SB 1



SB 2

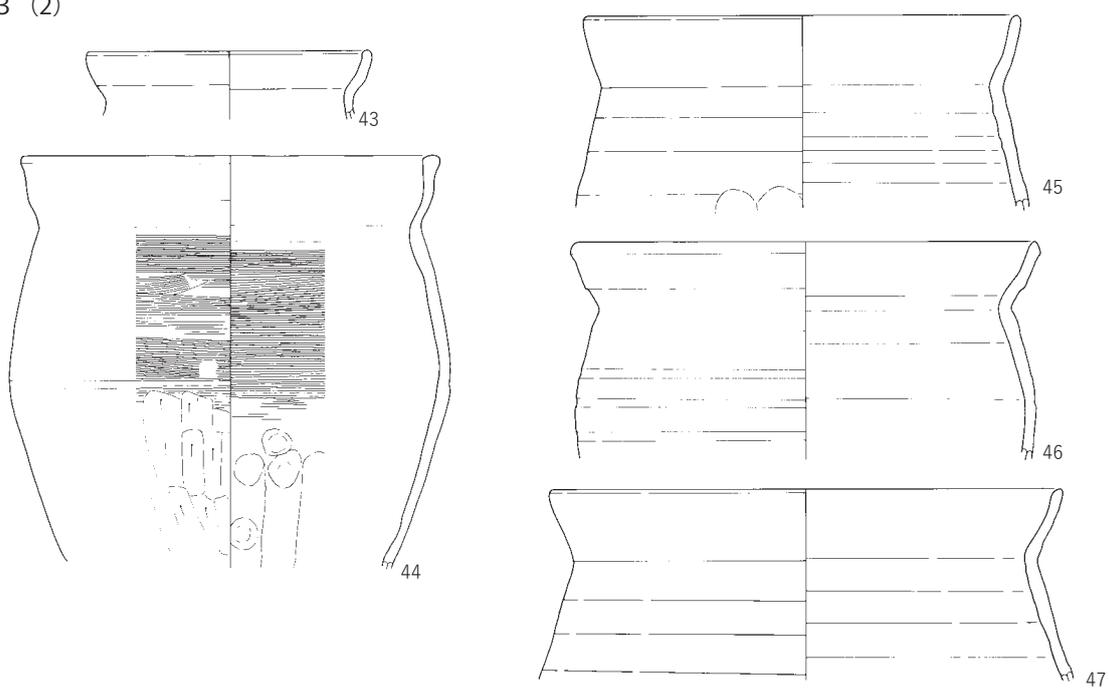


SB 3 (1)

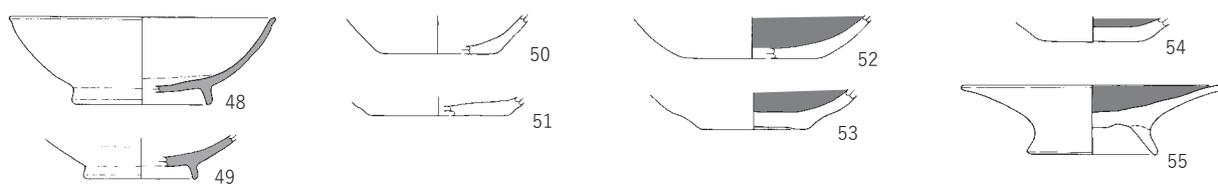


图版 6

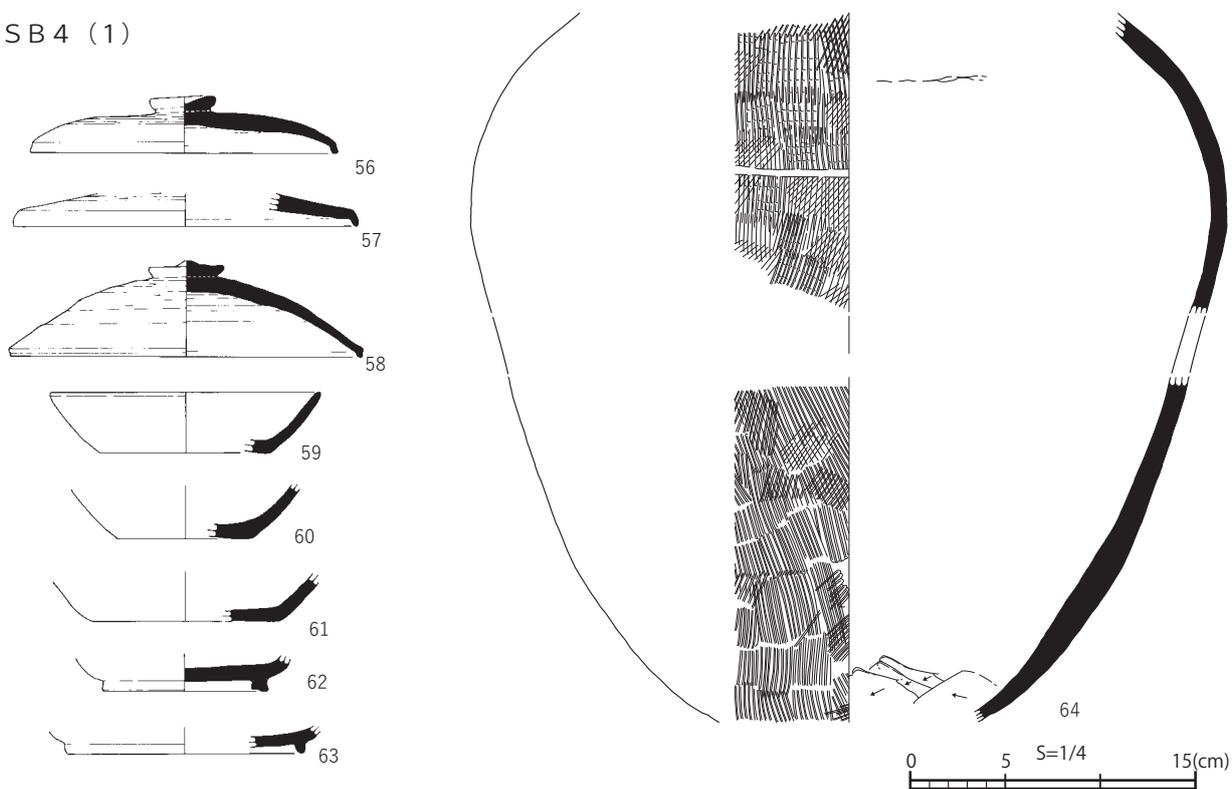
SB 3 (2)



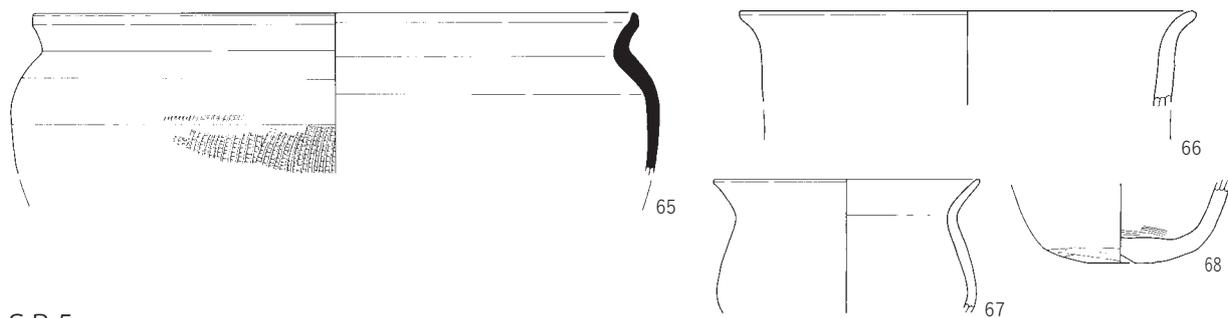
SB 2 · 3



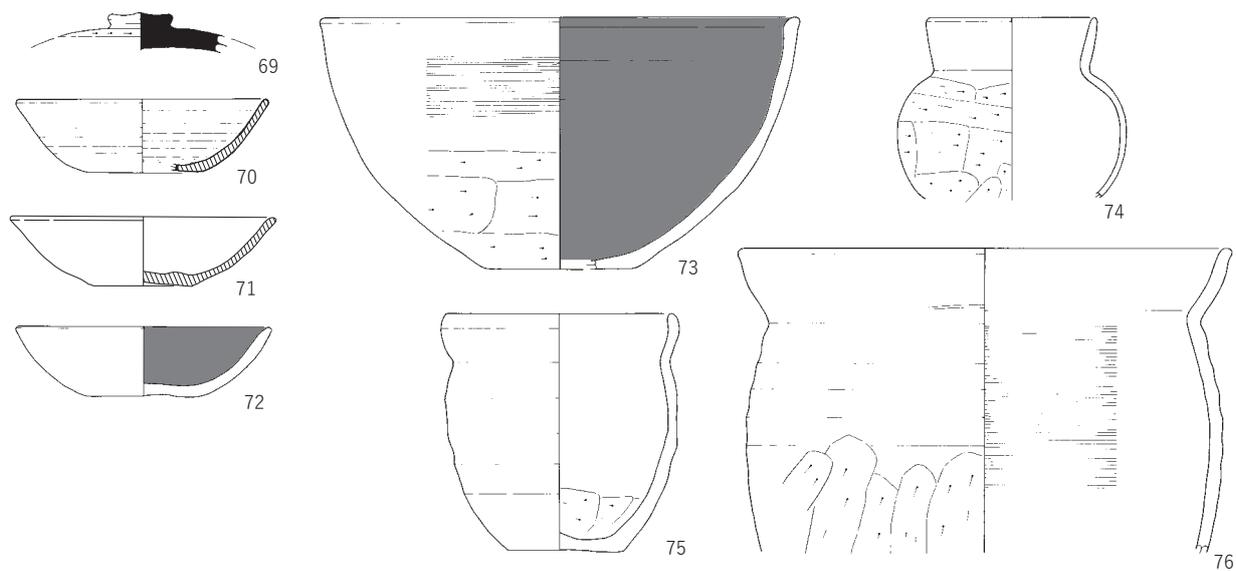
SB 4 (1)



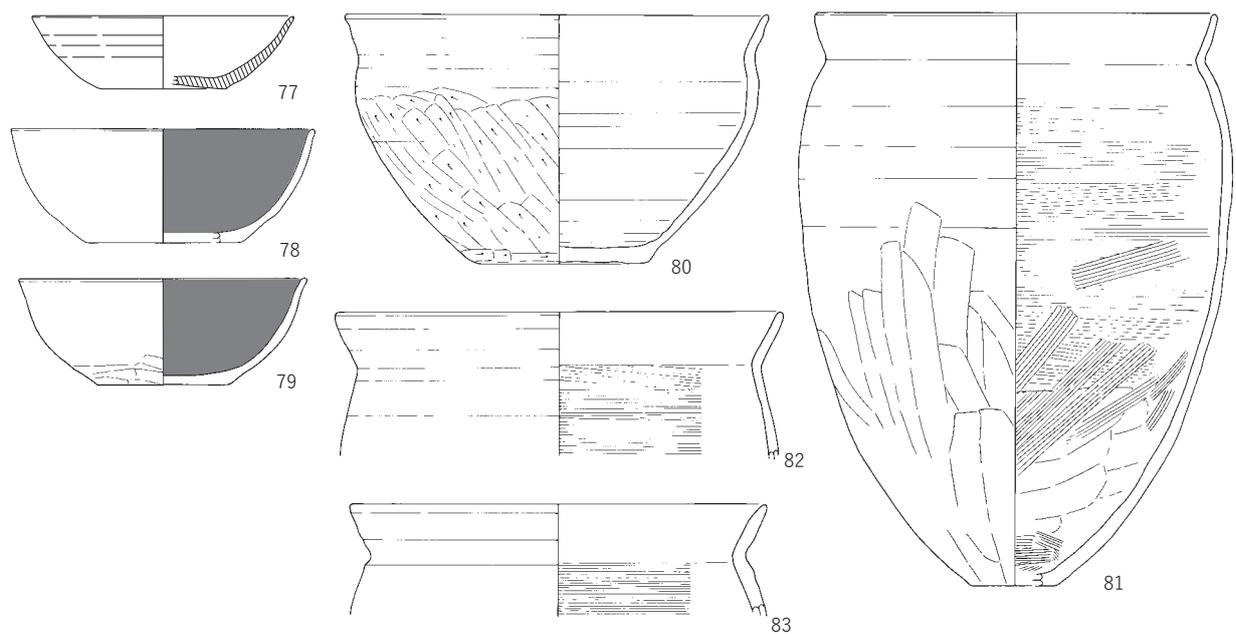
SB 4 (2)



SB 5



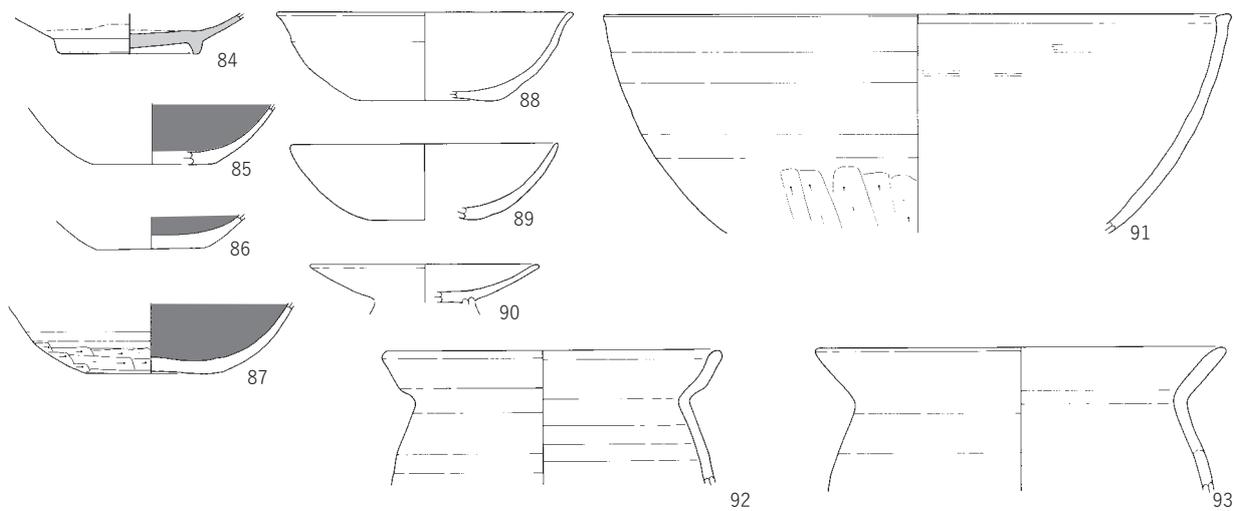
SB 6



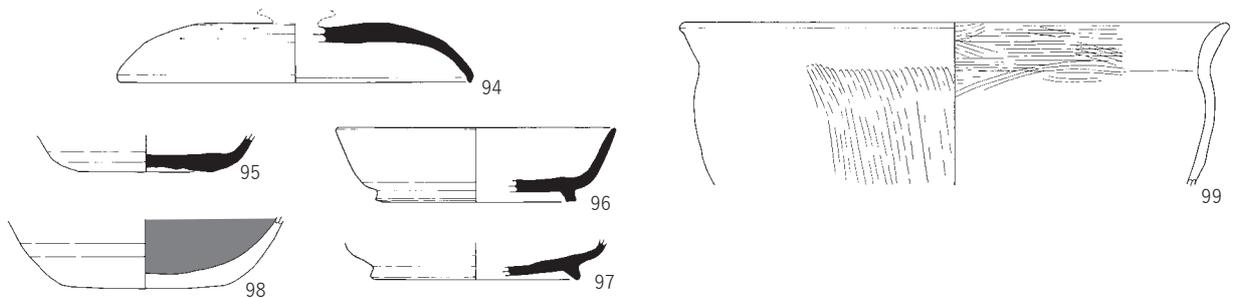
0 5 S=1/4 15(cm)

图版 8

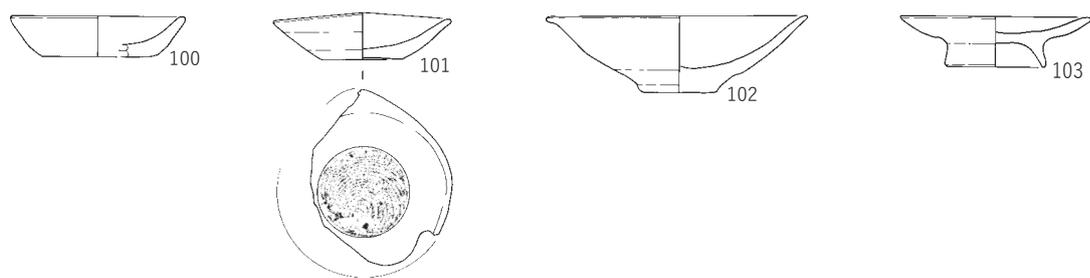
SB 7



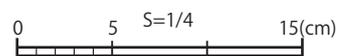
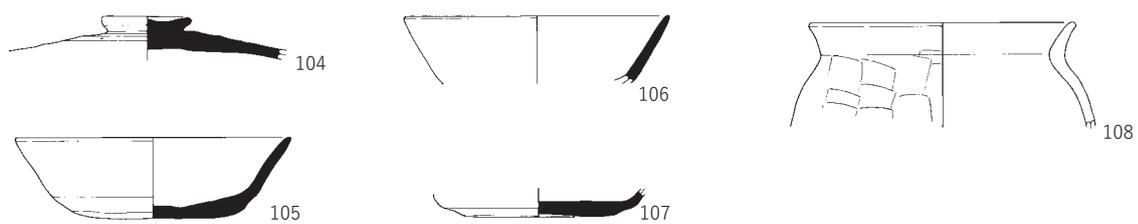
SB 8



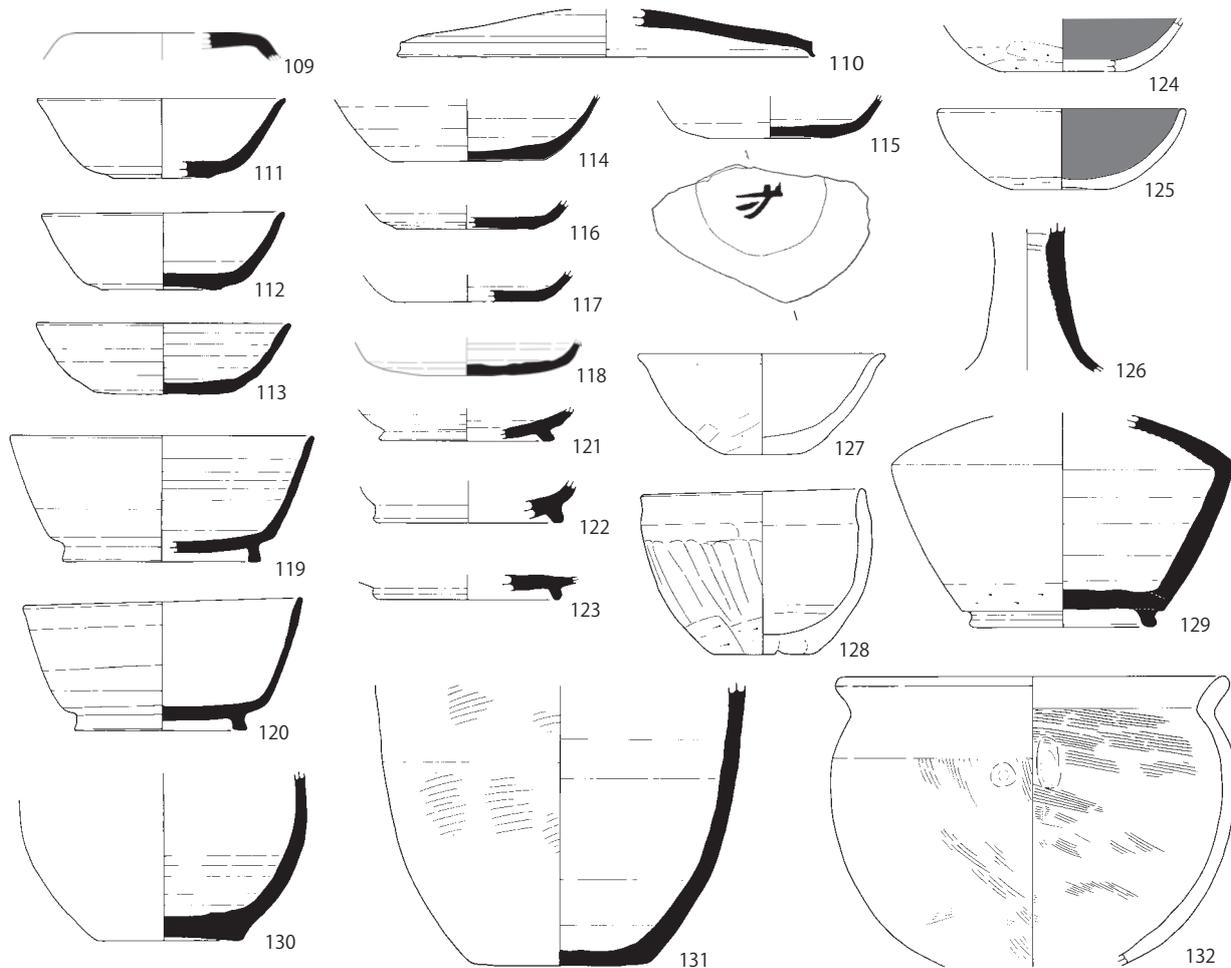
SK 3



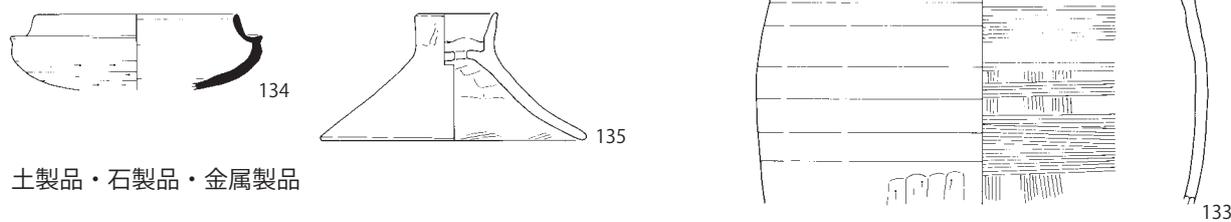
SK 6



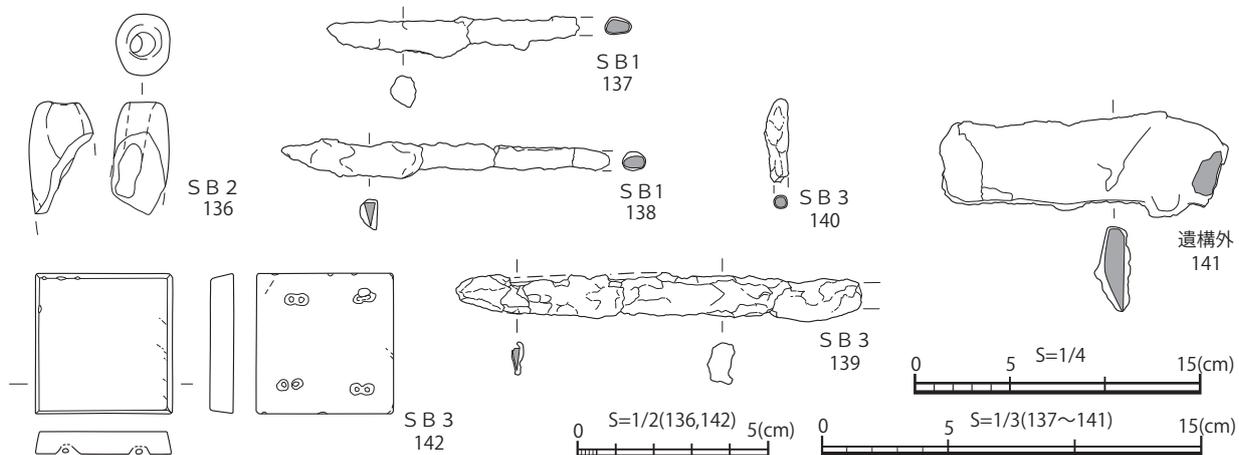
SK11



検出面下層



土製品・石製品・金属製品



遺構写真図版 1



A区全景（上方が北）



B区全景（南から）



SB1、SK3・4完掘（南から）



SB2・3完掘（南から）



SB2カマド完掘（西から）



SB3カマド遺物出土状況（南東から）



SB3カマド完掘（南から）



SB4完掘（西から）



SB4カマド完掘（西から）



SB5全景（南から）



SB 5・7・8完掘 (南から)



SB 5カマド完掘 (南から)



SB 8完掘 (南から)



SB 8カマド完掘 (南から)



SB 6完掘 (南から)



SB6カマド完掘（南から）



SB6 P1土層堆積状況（南から）



SD1土層堆積状況（東から）



SD1完掘（東から）



SD2土層堆積状況（南から）



SD3土層堆積状況（南から）

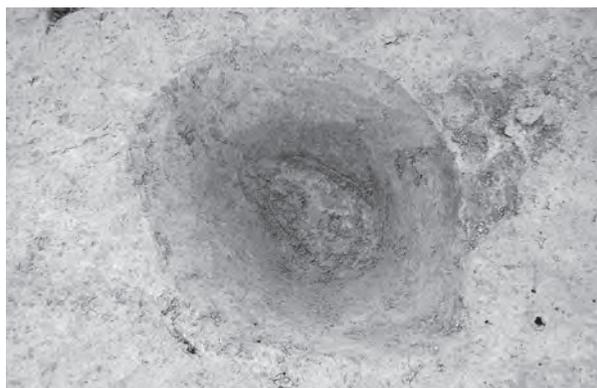


SK1完掘（西から）



SK3遺物出土状況（北西から）

遺構写真図版 5



S K 4完掘 (東から)



S K 2・9完掘 (西から)



S K 6土層堆積状況 (南西から)



S K 10炭化物検出状況 (西から)



S K 11遺物出土状況 (南から)



S K11 土層断面および完掘状況 (南から)



A区北トレンチ土層堆積状況 (南東から)



A区中央トレンチ土層堆積状況（北東から）



A区近現代井戸A（西から）



A区近現代井戸A内部



遺物写真図版 2





遺物写真図版 4





報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん ごんどうこしまきいせき							
書名	長野遺跡群 権堂腰巻遺跡							
副書名	(仮称) 長野市大字鶴賀新築マンション計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第173集							
編集者名	鹿田奨之 青木一男 田中暁穂							
編集機関	長野市教育委員会長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL026-284-0004・FAX026-284-0106							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ごんどうこしまきいせき 権堂腰巻遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 おおあざつるが あざこしまき 大字鶴賀字腰巻 2261-5 外	20201	C-027	36° 39' 09"	138° 18' 96"	20221212 ～ 20230130	507 m ²	マンション建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
権堂腰巻遺跡	集落	奈良時代	竪穴建物跡 土坑	2軒 1基	須恵器・土師器			
		平安時代	竪穴建物跡 土坑	6軒 1基	土師器・灰釉陶器 鉄製品・石製巡方			
		近現代	井戸跡	2基				
		時期不明	小穴 土坑 溝跡	16基 6基 3条				
要旨	裾花川河岸段丘と湯福川扇状地の複合扇状地上に位置する。調査では奈良時代から平安時代にかけての竪穴建物跡が8軒検出され、当該期の集落の存在が明らかとなった。出土遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器の他、竪穴建物の床面から石製巡方が出土している。また、遺構は伴わないが、古墳時代の須恵器、弥生土器等も出土しており、周辺に当該期の遺構が存在する可能性が考えられる。							

長野市の埋蔵文化財第173集

長野遺跡群

権堂腰巻遺跡

令和6年3月22日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 大日本法令印刷株式会社